未踏の郷里　ルーフェイア・シリーズ13

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未踏の郷里　ルーフェイア・シリーズ１３

【Ｎコード】
Ｎ９０３５Ｊ

【作者名】
こっこ

【あらすじ】
反王道、「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ◇◇記憶にない故郷が呼ぶ、未来への道。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第１３弾。◇◇ちょっと脇道へそれて、同級生とほのぼの謎解き？物語。このキャラみんな、覚えてるかな……◇◇“夜８時過ぎ”毎日更新です。携帯版は１行毎の改行ｏｒ空行です

Episode：01

◇Ａｒｍａｌ

冬休みの昼飯時。俺のテーブルときたら、一人だけだ。
いつもツルんでる相手のうち、イマドはアヴァンの親戚のとこへ行っちまった。

あいつ親とはなんかいろいろあって、ここへ死んだことにして放り込まれたらしい。前に何度か、そんなこと言ってた。
でも親父の弟さんが、あいつのことけっこう可愛がってる。長い休みのたんびに呼び寄せてるし、イマドのヤツも嫌がんないで行くし。
あとどうもあいつ、叔父さんから「引き取りたい」って言われてるっぽい。

まぁ、分かる気はする。
イマドの叔父さんとこは、娘ばっかだ。しかもみんな、医者継がないで嫁に出ちまってる。
だから頭いいイマドを引き取って、跡継ぎにさせたいんだろう。あいつなら医者くらい、やれそうだし。

けど当の本人は、そんな気さらさらなかったりする。
原因は……前は知らないけど、今はぜったいルーフェイアだ。

誰がどう見たってイマドのヤツ、一目惚れでぞっこん。普段は細かいことにこだわんなくて、そのくせ人当たりだけは抜群っつー「いいやつ」だけど、ルーフェイアが絡んだ瞬間マジで豹変する。
基本的にいい加減でめんどくさがりのアイツが、こんなになるな

んて、予想もしなかった。

いつもツルんでるもう一人、ヴィオレイは点検の当番だ。
この学院、何にしろ人数多い。しかも金なし。だから「自分ことは自分で」が原則だし、学院内のこともみんな手分けしてだから、けっこう大変だ。

っても、「十分マシ」ってのがみんなの評価だ。
何しろ俺らここ追ん出されたら、また元の宿無しメシ無しになる。もちろん学校なんて、どうやったって行けっこない。
この辺みんな分かってるから、案外文句はなかった。

曲がりなりにもこの学院、一応頭いいヤツしか入れない。で、そういう頭持ってる上にみんな苦労してるから、世の中のシビアさはよく知ってるわけで。
だったらちょっとくらい不満があっても、ここで我慢して自分の将来立て直すほうが先、ってのが、ほとんどの意見だ。

ついでに言うとそうじゃないヤツは、容赦なく退学だから、余計やらかさなかったりする。
うまく飼いならされてる気もするけど、他所へ行ったらロクに勉強も出来ないから、まぁ従うのが得ってことだ。

席は相変わらず、俺一人だった。
食堂は昼時だから、別に空いてるわけじゃない。けど、相席しようってヤツが、俺のとこには来ない。

――たぶんこの色だよな。
手を見ながら思う。
この学院でも1、2を争うんじゃないかってくらい、黒い肌だ。

Episode：02

意外だけど肌の色そのものでどうこうは、あんま言われない。
なんせシエラは、かなり多国籍だ。だから肌の色も髪の色も瞳の色も、色とりどりだったりする。

ただそん中でも俺みたいのは、さすがにかなり少数派だ。
別にシエラ側が、えり好みしてるわけじゃない。単に建ってる位置と国の関係で、俺みたいのが少ないだけだ。

っても少数派となれば、そんだけ立場は微妙なわけで。
ましてや相席ってなったら、似たような外見の相手選ぶのがふつうだ。女子は滅多に男子のとこへは行かないし、逆もそう。同じ女子同士男子同士のとこへ行くにしても、俺みたいにあからさまに違うヤツのとこは、知り合い以外は遠慮する。

責める気はなかった。だって俺も逆の立場なら、そうするだろうから。
別に誰も悪くない。なんとなく俺が、ちょっとモヤモヤしてるだけだ。
その点よく考えてみると、イマドだのヴィオレイのヤツはすげーな、と思う。最初の頃からたしか、そういうのを気にしてなかった。

何で一緒になったのかは、もう忘れた。イマドがいちばん先で、俺とヴィオレイが翌年の入学だったはずだ。たぶんAクラスに入った時点で、一緒になってったんだろう。
まぁどっちにしても、1人で食事なんて今限りなわけで……。

「あのね……ここ、いい？」

「え？」
いきなり声かけられて、焦る。
澄んだ声。金髪に華奢な身体つき。ルーフェイアだった。

「え、あ、あぁ、ほら座れよ」
ダメだ俺、慌てすぎ。

「えっと……ありがと」
「礼とかいいから、うん」
ルーフェイアがトレイを置いて、軽やかに座った。
当然注目の的。俺に刺さる視線が痛すぎる。

――気持ちいいけど。

狙ってるヤツ多数のルーフェイアが、自分のほうから相席言ってくるとか、今ごろ歯噛みしてるヤツかなりいるはず。
後がちょっと怖い気はするけど、今は考えないでおく。

「その、メシ、要るか？」
黙ってたらすごく悪いヤツの気がして、ともかく話してみる。
「え？　でも、ごはんここに……」
何言ってんだ落ち着け俺。目の前にメシあるっての。

「そ、そうだよな、うん。えーと、何か要るものは……」
だから落ち着け俺。取ってきてんだから、揃ってるに決まってるじゃん。

「えっと、大丈夫。ありがと」
ダメだ俺マジ舞い上がってる。笑顔とか向けてお礼言われたら、顔見らんねぇってば。

つか、なんか話題変えないと。墓穴掘りすぎだろ。

Episode：03

「えーと、えーと、その、珍しいな？　一人とか」
「……うん」
よし、今度はまともだ。ちゃんと会話繋がったし。たぶん。

「シーモアとナティエス、新年はみんなと一緒だって、ロデスティオに帰っちゃって……」
澄んだ声にちょっと感動。ルーフェイアが俺だけと話してる！

この子と2人で話すとか、実は難しい。シーモアたちだったり、イマドだったり、先輩だったり、ともかくいつも誰かと一緒だ。
で、シーモアたちが居るようなとこへ入ろうもんなら、おっそろしいことになる。

「ミルは？」
「ミルもまた、アヴァンで。ロア先輩は……任務だし。あと、イマドもアヴァンだし」

――天国から地獄。
やっぱそうだよな、俺ってただの代替品だよな……。
身体中からがっくり力が抜けてく。何やってんだよ俺。どうみても馬鹿じゃん。

「えっと、アーマル……くん？」
しょせん「くん」づけだし。
「あの、ごめんなさい……」
あ、ヤバイこの子泣く。

「いい、謝らなくて！」
焦って言ったらちょっとキツくなっちまって、ルーフェイアが身をすくませた。マジやばい。こんなとこで泣かせたら、俺絶対袋叩きだ。てか泣かせるとかサイテーだ。

「いやだから、えっと、じゃなくて、悪いの俺だし」
これじゃ何言ってんだか、余計わかんねぇだろ。
自分の性格と口下手を心底呪う。せめてヴィオレイみたいなら、もう少しちゃんと言えるだろうに。

「その、泣かないで食べろよ」
きょとんとした表情見せたあと、ルーフェイアが微笑んだ。やった！
「イマドと同じこと、言うんだ」

ご先祖様、俺泣いてもいいですか？
どうせダメだって分かってるのに魅かれる自分、哀れすぎだ。とはいえ、それで割り切れないのが「気持ち」なわけで。

かなりモヤモヤしながら、でもこの子に悟られないように、必死に表情を取り繕う。
でも気の利いたことも言えなくて、沈黙の昼食になった。ホントに俺ってダメだ。
耐え切んなかったみたいで、ルーフェイアのほうが口を開く。

「えっと、あのね……ヴィオレイ君は？」
「あぁ、あいつ当番」
って俺、ぶっきらぼうすぎだろ……。何でこんなふうにしか言えないんだよ。
けど意外だけど、この子がほっと息を吐いた。

「どした？」
「あ、うん。その……彼、ちょっと苦手で……」
今すごく、優越感感じてる自分が居たり。

Episode：04

「まぁほら、あいつも別に、ワザとじゃないし。心配してんだ」
「そうなんだ……」
なのについ、あいつをフォロー。しなきゃ俺がその分持ち上がるのに、出来ないあたりが小心者だ。

で、また会話が止まる。
俺どうしてこうなんだろう。ってか、ともかくなんか、話すこと探さないと。
そんなこと考えながら下を向いたとき、鎖がしゃらしゃら音を立てた。

「それ……？」
「あぁ、これ？　小さい時から持ってんだ」

首にかけた鎖と、その先に下がってる指輪。かなり大き目で、俺じゃ親指にはめてちょうどいいくらいだ。
四角い台座みたいになった部分に、何か記号みたいな彫り物。輪の部分もやっぱり、何か模様が彫られてた。

「珍しい、デザインだね」
「俺も、他に見たことない」
ルーフェイアが興味あるみたいだから、外して渡してやる。

「けっこう……古い？」
「かなぁ」
鎖に下がってる指輪、角が磨り減ってちょっと丸くなってたりして、とても新品には見えない。でも俺がチビの頃からこんな感じだ

ったから、けっこう年数経ってんだろう。
「どっかこういうの扱ってるとこなら、なんか分かっかな？」
「そうかも……あ」
何かを思い出した見たいに、ルーフェイアが顔を上げた。
「どした？」
「そういう店、行くんだった……」
なんか予定があったみたいだ。
「急がなくて、いいのか？」
「えっと、じゃなくて……店、ケンディクのどこか分からなくて……」
ルーフェイアはシエラ来てまだ日が浅いし、あんま出かけるほうでもないから、場所の見当がつかないんだろう。
「住所とか、分かるか？」
「えっと、うん、待って……」
この子が持ってたバッグを漁る。
「あれ……あ、あった」
出されたメモには、住所が書いてあった。
「これ、分からなくて……」
俺も覗き込んでみたけど、聞いたことのない住所だ。
「調べないとダメだな。食べたら探してやろうか？」
「いいの？」
ルーフェイアが、澄んだ碧い瞳を見開く。

Episode：05

「いいぞ。俺、時間あるし」
てか、こんなチャンス逃すわけが。イマドもシーモアもロア先輩もいなくて俺に回ってくるなんて、きっと二度とない。

「ありがと。あたしこういうの、苦手で……あ、えっと、今食べるね」
やっぱこの子いい。やたら気が強くて、その辺の男子より男っぽいシエラの他の女子とは、まったく違う。
せめてこの十万分の一でもいいから、あいつらも見習えばいいのに。

「急がなくていいぞ？　時間、あるから」
焦って食べてて喉に詰まらせそうで、そんなことを言ってみる。
ルーフェイアが笑った。大輪の花みたいだ。
「ありがと」

俺、これで一生分の運使い果たしたかも。
安心したのか、ルーフェイアはいつものペースで食べてく。ちょっとゆっくりだけど丁寧で、美味しそうだ。
俺はさっさと食べ終わっちまったから、配られた書類でも見てることにした。そうでもしないとこの子、きっとまた気遣って、慌てて食べ始める。

「それ……なに？」
書類に興味持ってくれたらしい。

「進路調査だよ」

「進路調査？」
ちょっと首をかしげて――可愛すぎる――この子が聞いてくる。
「ほら、来年度からカリキュラム、少し分かれるだろ？」
「そうなの？」
初めて聞いた、そんな表情だ。
――ダメだろ、あいつら。
イマドもシーモアもついてて、こんな大事なこと教えてないとか、何やってんだよ。
「えーとさ、俺ら来年になると、傭兵隊の試験受けられるだろ？」
「うん」
さすがにこれは、シエラじゃ常識中の常識だから、知ってるらしい。
「でさ、その先少し分かれるんだよ。だいたいは上級目指しながら仕官候補コースだけど、他に医務官とか、工兵とか選べる」
「そうなんだ……」
本気でこの子、何も知らないみたいだ。てか誰かマジで教えろってのの。
「あ、だから、カリキュラムが？」
「うん」
学年主席のルーフェイア、さすがにこの辺の察しはいい。
「普通のカリキュラムとって、傭兵隊に受かってからでもいいんだけどさ。でも事前に申請しとけば、それようの授業受けて、そっち専門で傭兵隊受けられる」
実言えば、悩んでるのはここのとこだ。

専門決めて受けるやつは少なくて、だから合格率が高い。けどその代わり、先の進路が狭まる。
ふつうに受けてそれからコース選ぶか、今のうちから決めるか。俺には大問題だ。

イマドみたいなヤツはいい。オールマイティで学科も実技も強いから、受かってからで十分間に合う。その点じゃ、ルーフェイアも同じだ。
ただ俺は、Aクラスの中じゃ本気でビリだった。自分でも、よく降格しないと思う。

Episode：06

原因は単純で、実技がＡクラスじゃ並で、学科がイマイチだからだ。やたら得意な工学系で点稼いで、どうにか落ちないでる。
これだとふつうの傭兵隊はともかく、上級はけっこう厳しい。Ｂクラスに実技だけは強いヤツなんかも居るから、そっちが先に受かりそうなくらいだ。

工学系が得意だし、物作ったりなんかも得意だから、そっちで受けりゃ間違いないんだろうけど……俺にはまだ決められなかった。
専門で受けたら、いわゆる上級隊にはなれない。だから踏ん切りが付かない。

「アーマル君……どうするの？」
「分かんないな。悩んでる」
俺の答えに、ルーフェイアが納得したみたいに頷いた。
だから逆に訊いてみる。

「お前は？」
「え？　あたし？　えっと……やっぱり、上級かな」
予想通りだ。

学科も出来るルーフェイアだけど、もっと飛びぬけてんのが実技だ。正直実技だけなら、上級隊の先輩にも引け取らない。
なんせ今の時点で、何度も任務に参加して、手放しの実績挙げてる。前線育ちってだけはあった。

「ま、今すぐ決めることでもないし。食べちゃえよ」
「うん」

ルーフェイアが昼食の残りを、口に運ぶ。
もういくらも残ってなかったから、じきに食べ終わって、この子が立ち上がった。

「ありがと」
「行こう」
トレイ片付けて、まず図書館へ。けど、ここからが難関だった。

「なんでないんだ？」
「分かんない……」
何がどうなってるんだか、探しても探しても例の住所、見当たらない。

「ほんとにケンディクか？」
「うん。ロア先輩、そう言ってたから……」
それでなんとなく分かった。
あの先輩悪い人じゃないけど、時々いい加減だって聞く。だから今回も、なんかテキトーな住所書いたんだろう。

「行き方とかは？」
「軌道バスで二駅くらい、って……。でもこの住所で調べれば、分かるからって」
調べればって、調べても分かんねぇじゃん。先輩何やってんだよ。

「軌道バスじゃ、範囲広いな」
「うん……」
これじゃきっと、先輩帰ってくるまでどこだか分かんないだろう。

「ちょっと、急ぎたかったんだけど……」
残念そうに肩を落としてうつむくルーフェイア、なんか気の毒す

ぎる。
「明日、探さないか？」
気づいたときには俺、そう言ってた。
「ダメかもだけど、探さないよりいいだろ？」
「え？　あ、うん。でも、いいの？」
驚きと、嬉しさの混じった表情。この子、こんな顔もするんだな。
「冬休みだから、時間あるし」
「そっか。――ありがと」
笑顔でお礼言われて、俺が内心また舞い上がったのは、言うまでもない。

Episode：07

◇Rufeir

海は穏やかだった。
――晴れて、良かった。
海が荒れると当たり前だけど、連絡船は欠航だ。それに雨の海は、なんだか寂しくて苦手だった。
けど今日は遠くまで見渡せるほどいい天気だから、とても綺麗だ。
新年を数日過ぎたせいか、それともまだ早いからなのか、船着場に人影はなかった。
あと少しで定時だからだろう、船頭さんが来る。

「おや独りでなんて珍しい。どこまで行くんだい？」
「いえ、友達と……待ち合わせてて」
答えると、船頭さんがうなずいた。

「なるほどね。けど、待ち人来たらずっってとこかな？」
「……はい」
約束したはずなのにアーマル君、まだ来ない。もしかして、忘れちゃったんだろうか？

「そろそろ時間だよ。どうする？」
「あ、えっと……」
乗るのは諦めて、探しに行ったほうがいいんだろうか？

そのとき、大きな声が聞こえた。
「船、待ってくれー！」

船頭さんと顔を見合わせる。

「来たのかな？」

「はい」

肌が黒いおかげで目立つ姿は、見間違えようがない。

アーマル君は手を振りながら、坂をすごい勢いで駆け下りてきて――転んだ。

「ありゃ、大丈夫かな？」

「あたし、ちょっと見て……」

言っているうちに彼、立ち上がってまた同じ勢いで駆けてくる。

すごいバイタリティだ。

「いやぁ、頑張るねぇ」

船頭さんは笑ってるけど、あたしは内心感心してた。

戦場で万一重傷を負ったとき、生死を決めるのは精神力だ。だから今のアーマル君みたいに、痛みをものともせず動ける人は強い。

ああいうふうに振舞えるなら、きっと彼、最前線でも生き残れるだろう。

そんなことを思ってる間に、アーマル君が目の前まで来る。身体を負って息を荒くして、ちょっと辛そうだ。

「……だいじょうぶ？　あと、怪我とか」

「え？　あ、ヘーキヘーキ」

息を整えて、彼が笑ってみせる。本当に強い。

「ほら2人とも、ケンディク行くなら早く乗って」

「あ、はい」

促されて、慌てて乗り込んだ。

Episode：08

船が動き出す。
小さな岬を回り込むように出ると、正面にケンディクの町が遠く見えて、左右には大洋が広がった。

やっぱりいいな、と思う。
冬の海は灰色だと書いてある本もあるけど、この辺はそんなことはない。荒れさえしなければ、深い藍の色だ。
夏の輝く碧も好きだけど、この冬の藍もあたしは好きだった。

「……だっけ？」
「え？」
隣から話しかけられて慌てる。ぜんぜん聞いてなかった。

「えっと、ごめんなさい……」
「いいって！　海、見てたんだろ？」
優しいな、と思う。ふつうなら何か一言二言、言われて当たり前のところだ。

人は話してみないと分からないと誰かが言ってたけど、本当だと思った。
正直言うとアーマル君、イマドとよく一緒にはいるけど、無口でほとんど話したことがない。だから取っつきづらくて、無愛想な人だと思ってた。
でも話してみるとまったく違うのだから、ほんとに先入観というのは良くない。

「ごめんなさい。えっと……何？」

「いいからいいから。着くまで海、見てな」
そう言われて、お礼を言って、視線を海へ戻した。
けどケンディクはもう目の前だ。あと少ししたら港へ入って、接岸するだろう。

何となく持ってきたメモを見る。「ケンディク市ノワイン３－４」と書いてあるけど、これが存在しないんだから世の中謎だ。
――先輩が帰ってくるまで、待てばよかったかな？
でもせっかくアーマル君が、一緒に探してくれるというのに、断るのはちょと出来ない。

ただどちらにしても一日これを口実に、ケンディクの町を歩けるだろう。そう思うとちょっと楽しみだ。
そうしてるうちに港の中に入って、連絡船が速度を落とした。
動力が止められ、軽い衝撃と共に接岸する。

「気をつけて行っておいで」
「はい、ありがとうございます」
船頭さんに挨拶をして、船を後にした。

「どこだろな？」
「どこだろ……」
歩き出してはみたものの、皆目見当がつかない。
ユリアス第二の都市と言われるだけあって、ケンディクは広い。
それを探し回るとなると、かなり大変だ。

「軌道バスに乗って……だとは、思うんだけど」
「行ってみるか」
列車の駅近くの、停留所へと足を向ける。軌道バスに乗るのは、実は初めてだった。

Episode：09

あたしたち学院生が「ケンディクへ行く」と言うときは、実際には港の周辺を指す。

南北に長めの大陸国家――といっても大陸としては最小――の南西隅に、ケンディクはあった。

はるか西、海を挟んだ向こうはアヴァン大陸。だからこの町は、古くから海の向こうとこの大陸とを結び、貿易の中心地として栄えてきた。

町のいちばん南部は、港だ。他に港から運ばれたものを売り買いする市場、小さな店なんかがいっぱいあって、賑わっている。あと景観のよさで、観光スポットとしても人気があった。学院生が出歩くのもこの辺りだ。

港の西から北西の海沿いは、商業区と呼ばれている。貿易関係の会社なんかがたくさんあって、そこに勤める人向けの商店や飲食店が多い。ただここは大人向けで全般的に高いから、あたしたちはあんまり行かなかった。

港の東側で目立つのは、シエラの分校だ。なにしろ規模だけは本校を上回るから、その敷地もとても広い。聞いた話じゃ、昔の大貴族の持っていた敷地を、丸ごと使ったんだって言う。

あともうひとつ目に付くのは、「裏町」とでも言うものだ。ロデスティオのスラムほどじゃないけど、そういう場所になっていて、あまり普通の人たちは近寄らなかった。

港の北、町の中心部に当たる辺りは行政区だ。そういう行政機関がいっぱいある。

あとここは元々、ここを支配していた領主や貴族たちの住むところだった。だから宮殿や石造りの古い町並み、劇場、大図書館なんかが集中していて、観光の目玉になっている。

周辺、特に北側は高級住宅街が広がるし、その人たちが買いにくる高級な店がたくさんあって、独特の雰囲気だっていう。

そして軌道バスがたくさん走っているのは、行政区と商業区だった。だから探している店は、このどこかなんだろう。

「やっぱり、行政区かな……？」

「かな。商業区、そゆ店あんま、なさそうだ」

意見が一致する。

「えっと、じゃぁ何番路線……」

「1番だ。行政区だから」

アーマル君、シエラに在籍が長いからケンディクも良く知ってるみたいだ。迷いもなく歩いていく後を、ついていく。

――ひとりで来なくてよかった。

あたしだけじゃ街の勝手が分からなくて、きっと迷っていたはずだ。

でもあの時は迷ったからこそ、イマドと会えたわけで……。

「ルーフェイア？」

「え？　あ、ごめん……」

考え事をしてたら、距離が離れてしまった。

「ごめん、早すぎた」

「ううん、あたしこそ……」

さっきもそうだったけど、本当に優しいな、と思う。こうやって合わせてくれるのは、あとはイマドと、シルファ先輩くらいだろう。

駅の脇――長距離列車の終着駅で、昔は貨物専用だった――を抜けて、すぐ先の停留所へ着くと、軌道バスがちょうど来たところだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１０

軌道バスは要するに、路面を走る小さな列車だ。道路に専用の軌道が敷かれていて、そこを走る。

車と違って好きなところへは行けないけれど、渋滞も交通規制もないし、路線も３０くらいあって、行政区と商業区じゃ文字通り「市民の足」だった。

ちなみに港区にこれがないのは、邪魔だったからだそうだ。人より荷物が行き交う港周辺は、馬車なんかのほうが使い勝手がよかったらしい。で、行き渡らないままになってしまったんだという。

コインを買って乗り込むと、中は空いていた。世間は平日だからだろう。

軌道バスが動き出して、窓から見える町並みが少しずつ変わっていく。雑多な賑わいが、華やかな賑わいへと移っていく。

石造りの、でもアヴァンとはまた違う、柔らかな曲線を持つ建物。広めに取った、見通しのいい道路。

その両脇を小さな軽食スタンドや、窓辺の花が彩っている。

「二駅だっけか？」

急に聞かれて慌てる。今日はこんなことばっかりだ。

「えっと、うん、たしかそう……」

自分でも呆れるくらい曖昧な答えだけど、アーマル君は怒らなかった。この辺はイマドに似てる。

「中央駅のそばか。店多そうだな」

どうも探すの、大変そうだ。

でもどうしても今日ってわけじゃないし、たまにはこんなふうに、探索で歩くのもいいだろう。
軌道バスが一つ目の停留所を過ぎた辺りで、大きな建物が見えてくる。

「あれ、中央駅？」
「ん？　初めてか？」
問いにあたしはうなずいた。

長距離列車は、終着駅が港のほうだ。だから学院とどこかを行き来するときは、港の駅から乗ってしまって、行政区の中央駅は素通りしてしまう。
そんなわけで、あたしは外からこの駅を見たことがなかった。

「降りよう」
「あ、うん」
軌道バスが止まるのを待って、急いで降りる。

「大きい……」
見上げた駅の大きさに圧倒される。アヴァンの駅も大きかったけど、それに引けをとらないだろう。
「何番線まで、あるのかな……」
思わず言うと、アーマル君が笑い出した。何かあたし、妙なことを言ったらしい。

「えっと、ごめん……」
「いや、俺こそ。てかルーフェイア、面白いな」
悪い意味はなさそうだけど、なんか微妙な言われ方だ。
だけど考えてみても何が微妙か分からなくて、結局諦めた。代わりに、今いちばんの問題を聞いてみる。

Episode：11

「店、どの辺か……分かる？」
「ごめん、ぜんぜん。でも、聞けばなんか分かると思う」
言って彼が歩き出す。
よく分からないままについていくと、アーマル君、近くの花屋さんに入った。

「すみません」
店員さんにさっさと声をかける。あたしじゃとても、あんなふうには出来ないだろう。

「この住所の店なんですけど。古物商で」
「古物商？　聞かないし、この住所も見たことないわね……」
住所の一覧に載ってないだけあって、やっぱり店探しは難関みたいだ。

「ごめんね、力になれなくて」
店員さんが謝った後、何かを思い出したみたいに手を叩いた。

「そうだ、バーの親父さんなら顔広いから、何か知ってるかも。待って、いま地図書いてあげる」
地図を描きながらその人が言うには、よく花を届けに行くらしい。

「この時間なら、店で仕込みしてるはず。行って脇の裏口、叩いてみて」
「ありがとうございます」
お礼を言って、花屋を後にする。
バーは地図を見る限り、ここからそう遠くはなさそうだった。た

ぶん同じブロック内だ。
「曲がるの、ここか？」
「たぶん……」
高級ブランドの店らしいところで、路地へ入る。
目抜き通りと違って、やっぱりこういう路地は細いしくねっていて、見通しが良くない。あと店構えや行きかう人も、華やかさよりは怪しさが勝っていた。
――早く抜けたほうがいいかな？
そんなことを思う。アーマル君も同じことを考えたのか、自然と早足だ。
と、向こうから何か不穏な空気を纏った一団が来た。目つきが鋭くて、獲物を探す肉食竜みたいだ。
「ルーフェイア、寄って」
「うん」
何かイヤなものを感じて、二人で脇へ寄って壁に貼り付く。
男の数は三人。ただ距離が近くなってみると、鍛えてはあるけど実戦経験は少なそうだった。
警戒は解かない。この人たち自然な感じを必死で作っているけど、害意があるのが丸見えだ。
きっと何かあるはず……そう思いながら彼らを観察してると、案の定、あたしたちの前で立ち止まった。
「こんなところでお前、何をしている？　この町はお前みたいなヤツが、来るところじゃないぞ」
「それは……」

答えようとして気づく。この人たち、あたしを見ていない。
もっと正確に言うと、アーマル君だけを見ている。他の通行人もあたしのことも、どういうわけか視界の外だ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１２

思ってもなかった状況に二人して黙ってると、また相手が口を開いた。

「頭の悪いヤツだな」

小馬鹿にしたような口調。

「お前みたいな色の黒いヤツが、一丁前の顔して歩くなって言ってるんだよ」

思わずアーマル君と顔を見合わせる。まさかこんな理由で言いがかりをつけられるなんて、思ってもみなかった。

（……行こう）

（うん）

関わってもロクなことはなさそうだし、ここはさっさと撤収するのがいいだろう。

でも逃げ出す前に、二人して取り囲まれた。

ちょっと小太りなのと、背の高いのと、縦横逞しいの。年は３０代くらいだろうか？　ただ３人とも、難しいことを考えるのは苦手そうだった。

男のひとり、小太りなのがあたしに視線を向ける。

「あんたもあんただ。なんでこんなヤツと一緒にいる」

「だって、友達だから……」

あたしの答えに、男たちが笑い出した。

「こんなヤツと『トモダチ』なのか！」

なぜ笑うのかも、何を言われているかもまったく分からない。

そんなあたしの様子に気づいたんだろう、今度は逞しいのが、顔を近づけて話しかけてきた。

――すごく、イヤかも。

口臭がひどいし、にやけた表情も申し訳ないけど気持ち悪い。

「いいか、お嬢ちゃん。こいつらみたいのはな、喋るケダモノなんだ」

「……？」

余計に意味が分からない。

あたしの思いを知ってか知らずか、男は続ける。

「まぁまだ子供だから、知らないのも仕方ないが。人ってのは色が黒けりゃ黒いほど、デキが悪いんだよ」

瞬間、あたしは相手を引っ叩いていた。

「そんなの関係ないでしょう！」

不様に尻餅をついて、頬を押さえてこっちを見る、見かけだけ逞しい男を睨み返す。

「彼はあなたたちより、よっぽどちゃんとしてます！」

要するにこの男たちは、見た目で人を決めつけているのだ。

自分たちのほうがよっぽどどうかしてるのに、そんなのは棚に上げて、アーマル君を見下している。

「なんて子だ……」

「この色つきに、騙されてんだな」

男たちから、殺気――たぶん本人たちはそのつもり――が立ちのぼった。

尻餅をついていた逞しいのも立ち上がる。

Episode：13

「なんて子だ……」
「この色つきに、騙されてんだな」
男たちから、殺気――たぶん本人たちはそのつもり――が立ちのぼった。
尻餅をついていた逞しいのも立ち上がる。
「この色つき、懲らしめて――」
アーマル君に向けて拳を振り上げた逞しいのへ、あたしは一気に詰め寄った。そしてそのままの勢いで、股間に蹴りを叩き込む。
なんだかすごい悲鳴が上がって、逞しいのが動かなくなった。
視線を向けると、残る2人があとずさる。もう戦う気はなさそうだ。

「アーマル君、行こう」
「あ、ああ」
なんだか妙な声に振り返ると、アーマル君まで股間を押さえてる。
「大丈夫……？」
何か当たったんだろうか？
「だ、だいじょぶだいじょぶ。うん。行こう」
言って彼、背筋を伸ばした。これなら心配なさそうだ。
「えっと、どっちだっけ……」
「こっちかな」
思わず握り締めたみたいで、くしゃくしゃになった地図を見ながら、彼が指差す。

「地下じゃ、ないんだ……」
ロデスティオのスラムの、レニーサさんのところは地下だったから、みんなそうだと思ってた。
書いてあるとおりに少し行くと、たしかに古そうなビルの1階に、看板が出ている。

「……裏口どこだよ」
「どこだろ……？」
建物のどこかにあるんだろうけど、ちょっと見当がつかない。

「いいやもう」
面倒くさくなったみたいで、アーマル君がドアを叩いた。

「すみませーん」
「なんだ、うちに用だったのか」
なぜか後ろから声が聞こえて、二人で振り返る。

「いやぁ、買出しに出かけた帰りに、すごいもの見たよ」
細身で白髪、口ひげのおじさんが笑っていた。
「災難だったね、あんなのに絡まれて。あ、災難だったのは向こうかな？」
言いながらあたしの頭を撫でる。

「こんなこと言っちゃいけないかもしれないが、ちょっとすっとしたよ。あいつら、私にもいろいろ嫌がらせしてね」
おじさんがそんなことを言うのは、肌がちょっとだけ、赤銅色かかってるからだろう。あの三人組はやたらと肌の色にこだわっていたから、言いがかりをつけられてたに違いない。

Episode：14

「で、何の用かな？」
「俺たちその、店を探してて……」
アーマル君が言うのを聞いて、あたしは急いでメモを出した。
おじさんが覗き込む。

「どれどれ？　あぁ、こりゃ旧住所だ。ずいぶん前に表示が変わったんだけどね、まだこっちのほうを言う人もいるんだよ」
どうりで分からないわけだ。

「今で言う、どこになったっけかな？　ともかく入りなさい、調べてあげるよ」
言いながらおじさんが、ドアを開けた。
魔光灯がつけられてもまだ、薄暗い店内。でもテーブルや花瓶、グラスなんかはどれも、質がよさそうだ。

「その辺に座って。何か用意するから」
その間にも手は動いて、オレンジなんかがが絞られて、冷機庫から出された何かと混ぜられる。

「さぁどうぞ、お酒は入ってないよ」
「すみません」
口をつけてみると、見た目からは想像できないような複雑な味で、なのにとても爽やかだった。

「本当はお酒で割るんだけどね。でも代わりに、ソーダ水で割ってみたんだ。どうだい？」
「美味しいです」

おじさんが満足そうに笑う。

「良かった。いま知り合いにちょっと、この住所聞いてみるよ。もう少し待ってられるかい？」

「はい」

おじさんが手を動かしながら、通話石で話し始めた。

「ああ、忙しいのに済まない。ちょっと教えてもらいたいことがあってね」

その間にも手元では、手際よく何かが作られていく。

「……ああ、それでいいよ。なんならついでに、何か食べてってくれ。いやいや、いいから」

どうやら、こういうのに詳しい人を呼んだみたいだ。

おじさんがこっちに向き直る。

「ここへいつも来る配達屋が、あと少ししたら来てくれるそうだ。彼なら本職だから、何か分かると思うよ」

なるほど、と思う。

配達屋さんなら、住所のプロだ。だったら昔の住所も、だいたいなら分かるだろう。

「ほら出来た。熱いうちにどうぞ」

大皿に乗せられた、あつあつのホットサンドが目の前に出されて、二人で顔を見合わせた。

Episode：15

「あの、でも、お金とか……」
アーマル君の言葉に、バーのマスターが笑い出した。
「子供からお金なんて取らないよ。それより、食べ盛りだからお腹すいただろう？　余り物のあり合わせだけど、食べていきなさい」
「ありがとうございます！」
言うなりアーマル君が両手を伸ばして……途中で止まる。
「ごめん」
謝って彼、半分こっちに分けてくれた。
――でもちょっと、多いかな？
どうもあたしは、たくさん食べるのは苦手だった。先輩なんかから「食べたほうがいい」って言われるのだけど、どうしても入らない。
せっかく分けてくれたのに、これじゃ残すだけだろう。
「えっと、あのね……ごめん、こんなにムリ……」
申し訳なくてやっとそれだけ言って、ひとつ手に取った。
「え？　あ、ごめん、そうだった」
でもアーマル君、いやな顔ひとつしないどころか、謝ってくれる。
「もともとあんま、食べないもんな。ゴメン」
言って彼、今度は3割くらいをこっちにくれた。
「ごめんね、ありがとう」

このくらいなら、あたしでも食べられる。
そんなことをやっていると、ドアがノックされた。

「おや、来たかな？」
マスターが手を止めて――今度は何を作ってたんだろう――出て行くと、大きな声での挨拶が聞こえて、配達屋の制服を着た人が入ってきた。

「仕事中にすまないね」
「早めの昼飯でも、食べたことにするさ」
茶色の瞳が優しそうな、丸顔のおじさんだ。身体も顔と同じように丸くて、しかも縦横に大きい。横幅なんてあたしの４倍くらいあって、狭いドアだとつっかえてしまいそうだった。

「そう言うと思ってね、簡単なものだが用意しておいたよ」
「こりゃありがたい！」
配達屋のおじさんが早速手を伸ばす。
「今朝は子供にパンを食べられてしまってね、お腹が空いてたんだよ」
生存競争が激しいのは、どこも同じみたいだ。

「で、なんだい、聞きたいことってのは」
猛烈な勢いで食べながら、配達屋のおじさんが訊いた。
あたしが慌ててメモを出すと、マスターが言い添える。

「この子達が、この住所にあるっていう古物商を探してててね。ただ旧住所だから、よく分からないんだよ」
「あぁ、ここなら知ってるよ。たまに配達に行くからね」
「ほんとですか？」
昨日からあんなに苦労したのに、こんなに簡単に分かるなんて思

わなかった。

Episode：16

「そりゃ、配達屋だからね。でもちょっと、見当違いのほうへ来ちゃったね」
言っておじさん、今度はぐびぐびとジュースを飲む。縦横に大きいだけあって、食べるほうも相当だ。
一気に飲んで息をついて、配達屋のおじさんは続けた。
「その店、行政区じゃなくて、シエラの分校のほうだよ」
「え……」
なんだかあたしたち、思いっきり勘違いしてたみたいだ。
「港から、軌道バスで2駅って聞いたんですけど……」
「うん、それで間違ってない。ただ4番で、降りてからけっこう歩くんだよ」
何のことかよく分からなくてアーマル君の顔を見ると、説明してくれた。
「一応シエラの分校のほうにも、軌道バス通ってるんだよ。港からじゃ歩いたほうが早いから、俺ら使わないけど」
「そうなんだ……」
シエラの分校は南門から出れば、すぐ港だ。ただ敷地がけっこう広いから、反対の北側にでも軌道バスの停留所があるんだろう。
配達屋のおじさんが、最後の一口を口に押し込んでから、ペンと紙を取り出した。
「ここからだと、18番の軌道バスに乗って7つ目がいいかな。その停留所からだと、いくらも歩かないし」

さらさらと地図が描かれていく。

「さ、これでいい。もし分からなくなったら、降りた辺りで『ナザールの古道具屋』って聞けばいいよ」

「ありがとうございます」

お礼を言うと、配達屋のおじさんが下を向いて頭を掻いた。

「いやぁ、お礼なんて。仕事柄、こういうのは詳しいしね」

巨体に似合わず、恥ずかしがりみたいだ。

「はは、相変わらずアンタは美少女に弱いな。すぐこれだ」

「言わないでくれよ……」

配達屋のおじさん、こっちを時々見ながら、両手で顔を隠して首を振っている。よっぽど言われたくないんだろう。

――けど、美少女って？

あたしが首を傾げてると、アーマル君が立ち上がった。

「ごちそうさまでした、美味しかったです」

彼の言葉を聞きながら、あたしも慌てて立ち上がる。

「それは良かった。この辺来たらまた寄っておくれ」

「はい」

マスターに送られて、店を出る。

最後に振り向くと、配達屋のおじさんが次のお皿を食べながら手を振っていて、あたしも振り返した。

「18番の軌道バスは、ここをまっすぐ行ったところだよ」

マスターが、来たのとは反対を指差す。

「ありがとうございます」

お礼を言って、あたしたちは歩き出した。

Episode：17

◇Ａｒｍａｌ

教えてもらった停留所は、すぐ見つかった。なにしろ裏路地出てど真ん前なんだから、間違いようがない。
少し待って、来たやつに乗り込む。

「この辺って、すごいね……アヴァンみたい」
ルーフェイア、窓の外見ながら嬉しそうだ。ちょっと子供っぽい感じもするけど、もともと小柄で華奢だから、むしろ似合ってる。
乗り合わせてる人は、みんなルーフェイアに視線が１回は行ってた。やっぱり目を引くんだろう。

――イマドの苦労、なんか分かるな。

ルーフェイアが居ないとこでよくあいつ、ボヤいてる。自覚してない上に人疑わなくて、無防備で危なすぎるって。
そんなもんかなーって話半分だったけど、俺も確信。マジでルーフェイア、ヤバい。

いい年したオヤジが美少女好きとか、たいていは聞いたら引く。
あの配達屋の親父も悪気はないのかもしんないけど、世の中何があるか分かんないワケで。だから「美少女好き」なんて言葉が飛び出したら、たいていの子は警戒するもんだ。

なのにルーフェイアときたら、そういう反応はカケラもない。全く何も疑ってない。
そりゃ人を信じるのは悪くないけど、信じすぎるのも問題だ。

「あれ……何？」
「え？」
急に話しかけられて、心臓が駆け足になる。二人だけとか、なんかまだダメだ。

「えっと、あの建物」
「あぁ、図書館」
ルーフェイアの瞳が輝いた。

「本、いっぱいありそう……」
「１００万とか聞いた」
ホント俺、ぶっきらぼうな言い方しか出来なくて情けない。
ただルーフェイアのほうは、それどこじゃないっぽい。お菓子見つけた小さい子みたいに、瞳がきらきらしてる。本が大好きだから、行きたくてしょうがないんだろう。

「今度、来る？」
「うん」
ルーフェイアはうれしそうに返事したけど、実際にはもう2人で来る機会なんて、ないだろなーと思う。

古物商の件が済んでから来てもいいけど、俺的にはしたくなかった。
なんたってルーフェイア、いつだって周りはお付きが満載だ。だから今日みたいな幸運、もう二度とないはず。
だったらまだ時間も早いし、図書館なんて辛気臭いとこじゃなくて、公園なんかへ俺的には行きたい。

Episode：18

「あのね、あれは……？」
「博物館。元々は宮殿」
他にも劇場、広場、大学と、有名どころに差し掛かるたんびに聞いてくる。けどすごく楽しそうだ。

それにしたってルーフェイア、もう何年もシエラに居るのに、びっくりするほどケンディク知らない。こんど街めぐりでもしたほうが、マジでいいかもしんない。
まぁ、いっぱいオマケが来るんだろうけど……。
そうやってるうちに少しずつ街の雰囲気が変わって、目的の停留所へ着いた。

「降りないと」
「あ、うん」
まだ外見てたそうなルーフェイアを、促して降りる。イマドも言ってたけど、確かに誰かが見てないと、いろいろ危なっかしい感じだ。
でもそんなとこも、可愛いわけだけど。

「どこだろ……」
ルーフェイアが周りを見回すと、金髪がそれに合わせて踊った。すごく綺麗だ。

「こっちだ」
地図を見て、歩き出す。
気配がしないから心配になって振り返ってみると、ルーフェイアが足音もさせずについてきてた。

戦場上がりなだけあって、こういうとこも俺らとは違う。でも言ったらまた泣きそうだから、言わなかった。

街の雰囲気は、港に近い。いろいろ雑多に混じってて、行き交う人の格好もさまざまだ。

あと今更ながらに気づいたのが、かなり多国籍だ。港町だからなんだろうけど、髪も瞳も肌もいろんな人が多かった。

俺的にはこのほうがいいな……なんて思いながら、歩いていく。さっきみたいな、あんな連中に絡まれるのはゴメンだ。

てか内心、けっこう動揺してる。話には聞いてたけど、実力重視のシエラじゃこんなことなかった。

シエラでその手の話がほとんどないのは、やってるヒマがないからだ。

なんせ学院、ひとつ間違えば大怪我するような授業も多いわけで。しかも、グループで何かすることもしょっちゅうだ。だから「出来るヤツ」と組まないと、冗談抜きでとんでもないことになる。結果として、実力さえあれば色なんて気にするヤツは居なかった。

「あ、ここかも……？」

言ってルーフェイアが立ち止まる。

「かな」

配達屋のおじさんが言ってたとおり、「ナザールの店」って看板が出てた。

「すみません……」

ルーフェイアがドア開けて、恐る恐るって調子で入ってく。

店の中は、ワケわかんないものが満載だった。なんか古びた壷、ティーセット、人形、ランプ、昔の魔道士が使ってたような杖、魔

方陣、ほんとに何でもアリだ。

Episode：19

「あの……？」
人影がなくて不安なんだろう、ルーフェイアがもっかい、大きくはない声で呼ぶ。

「あー、すまんすまん、はいいらっしゃい」
声がして、奥から人が出てきた。配達屋ほどじゃないけどしっかり太った、禿げオヤジだ。
その視線が、ルーフェイアで止まる。

「驚いた、どこの迷子だい？」
「いえ、あの、あたし、そうじゃなくて……」
おどおどしながら、やっとここまでルーフェイアが言ったけど、あとが出てこない。人見知りで大人しいから、気後れしてんのかもしれない。
一瞬考えてから、勇気出して話に割り込んでみた。

「あの、彼女なんか、欲しいものあるらしいんですけど」
「欲しいもの？」
オヤジの目が細められる。どう見ても俺らのこと、品定めしてる感じだ。
と、ルーフェイアが顔上げて一歩出た。

――見たことない、毅然とした横顔。
どっかのお嬢さまみたいで、なんか見てるだけでドキドキする。

「短剣、入りましたよね？」
「え？　あ、あれですか」

一瞬呆けてたオヤジ、気圧されたらしい。言葉遣いまで変わってる。

「見せて……もらえますか？　探していたものなら、この場で買い取ります」

言ってルーフェイアが、札束をカウンターに置いた。

「はいはい、今すぐ」

とたんにオヤジの表情が変わって、禿げ頭がカウンターの下へ沈む。揉み手でもしそうだ。

「これは偶然手に入れたんですが、どこから知ったんだか問い合わせが多くて」

言って出したのは、大きな宝石が着いた短剣だった。

もしこの石が本物なら――っていうか、どう見ても本物っぽいけど――きっとものすごい値段だ。

「あの、刃も見たいんですけど……」

「ええ、どうぞどうぞ」

オヤジが鞘から引き抜いて、ルーフェイアに手渡す。

「あ、やっぱり……」

彼女が独り言みたいにつぶやいて、何か小さく唱えた。

「これは……」

「すげぇ……」

何にどう反応したのか、刃がぼうっと光りだす。

やっと見つけた、そんな顔でルーフェイアがオヤジに向き直った。

「売っていただけますか？」

「か、構いませんが、これいわく付きで」

オヤジが口をもごもごさせながら、話し出した。

Episode：20

「その、ホントかどうか知りませんけど、持ち主が次々に衰弱死したとかで……」
「知ってます」
なんかもう、ワケ分かんなかった。少年兵あがりでシエラに居て、なのにこんな金持ってて、しかもワケありの短剣買いに来るとか、ふつうじゃない。
けどルーフェイアのほうは、当たり前って表情だ。
「本来、外へ出したらいけないものなんです。なのに手違いで、流出してしまって……。お幾らですか？」
そこまで言ってから、ルーフェイアが微笑んだ。
「そちらの言い値で、構いません」
華やかで邪気のない、なのに何故か、ぞっとするような笑顔。自分の立場が圧倒的に上で相手が逆らうなんて考えてない、逆らったってどうにでもなる、そんな自信が透けて見えた。
思い出す。ルーフェイアの居ないとこで、大人しくて可愛い、でもイザって時には強く出られなそうで心配だってヴィオレイと話してたとき、イマドが言った。たしか「アイツはそんなにヤワじゃねーよ」とか、そんなふうだった。
そのときはバトルが強いのを言ってんだろうと思ってたけど、違う。イマドはいつも一緒にいるから、ルーフェイアのこういう面も知ってたんだろう。
――なんか、凹む。
これじゃ俺、ルーフェイアのこと何も知らないで騒いでた、ただ

の道化師だろ……。
こっちでがっくり来てる間に、商談はまとまったっぽかった。
「じゃぁ、これを……手付けで。不足はこちらに請求してください。誰かが値を吊り上げたら、その額に上乗せします」
「いえ、とんでもない！　私も早く手放したかったですから、この額で十分ですよ」
どこまでホントか分かんない愛想のいい顔で、オヤジが言う。
「それより、また何かあったら言って下さい。世界中駆け回っても探してきますから」
商売人だから仕方ないのかもだけど、オヤジちゃっかりしすぎだろ。
と、その商売人の目が俺に注がれた。
「おや君、珍しいものを付けてるね。見せてくれないか？」
「へ？」
何のことか分かんなくて、思わず辺りをきょろきょろする。
オヤジが笑いながら指差した。
「違う違う、ほらその君のネックレスの先の、指輪だよ。指輪だろ？」
「あ、これ……」
首から外して手渡すと、オヤジが拡大鏡取り出して見始めた。
「あーやっぱり。古いものだね。それに珍しい。どこで手に入れたんだい？」
「さぁ……？　うんとちっちゃい頃から、持ってるんで。死んだ親父かおふくろが、持たせてくれたんだと思うんですけど」
この辺の記憶、俺はかなり曖昧だ。

いちばん古い記憶は誰かと延々と、乾いた大地を歩いてたこと。喉がひりひりしてお腹が空いて、辛かったの覚えてる。そのとき一緒に居てよく抱いてくれた女の人が、たぶんおふくろだろう。

Episode：21

それからあとは、子供ばっかりのどこかに居た記憶が続く。何度か場所変わって、最後にシエラの分校へ来た。で、そこの教官にはっぱかけられて試験受けて、今の本校だ。
気が付くとオヤジが、すごく辛そうな顔してた。

「いやその……悪かった。そんな事情とは思わなくて」
「別にいいですよ。俺、あんま気にしてないし」
正直小さい頃のことを辿っても、あんま覚えてなかったりする。いい思い出がないからかもしれない。

ともかくシエラ来てからの方が、ずっと良かった。ここは食い物も着る物も足りてるし、やればやっただけ認めてもらえる。
なのにオヤジ、ますます申し訳なさそうな顔になった。

「その、嫌な思いさせた償いってわけじゃないが……この指輪、エバスの南の、ニルギア大陸のものだ」
「ニルギア？」

ニルギアって言えば、俺みたいな肌の黒いヤツが、当たり前にいるところだ。
けどそれ以上のことは、よく知らなかった。たしか内戦や紛争が多くて貧しい、って習った気がするけど……。

「この指輪の模様みたいなのはたしか、ニルギアの文字のはずだよ。長男には代々伝わってる指輪を渡すって話も聞いたことあるから、間違いないだろう」
「代々……」

今まで、深く考えてもみなかった言葉だ。

なんでか知らないけど俺、昔からご先祖様に祈る癖がある。かなり小さい頃からだから、誰かが俺の周りでやってたんだろう。

だけどその「ご先祖様」が、現実に出てくるなんて思わなかった。

同時にすごく知りたくなる。俺はホントはどこから来て、どんな人の子供だったんだろう？

「あの、他になにか、知りませんか？」

「え？　いや、他にって言われてもそんなには……そうだ、ちょっと待ってくれないか」

言うとオヤジ、通話石でどっかと話し始めた。

「――居てよかった。そう、ニルギア大陸の古い指輪だよ。どこのかだって？　それはアンタが専門だろう。何、見たい？　そう言うと思ったよ」

少しの間話してから、オヤジが通話を終えた。

にこにこ顔で、俺らのほうへ向き直る。

「この店によく来る教授が居てね、ニルギアの研究家なんだ。ぜひ指輪を見たいって言ってるんだが、どうする？」

「行きます！」

思わず俺、勢い込んでそう答えてた。

でも直後に、大失敗やらかしたことに気がつく。ここに来たのはルーフェイアのためで、俺の指輪なんて話に入ってない。

「えっと、ルーフェイア、ゴメン、俺別に……」

言いかけた言葉を、涼やかな声が遮った。

Episode：22

「アーマル君、行こう」
この子らしい控えめな、でもはっきりした口調。
「けどほら、予定とか」
「大丈夫。それにその、今日、助けてもらったから……」

ご先祖様、俺感激で、前見えなくなりそうです。
ルーフェイアが優しいのは良く知ってるけど、俺の思いつきにまで気遣ってくれるとか、いい娘すぎる。

「行けるのかい？　なら場所教えるよ。っても大学だから、間違いようないが」
オヤジが書き付けた紙を、渡してくれた。「ケンディク大学　ニルギア文化研究室教授、ペドジフ＝ロドア」って書いてある。

「ふだんは忙しい人なんだけどね、ほら、まだ冬休みだろう？　もしやと思って連絡したら、大当たりさ」
たしかに世間はもう平常だけど、俺たち学生はまだ休みだ。だからこの教授とやらも、のんびりしてたんだろう。

「ここへ来るとき使った軌道バスで３つ戻れば、大学の南門だよ。教授にはこれから行くって、連絡しておくから」
「ありがとうございます」

３枚目のメモを手に、お礼を言って店を出る。
なんだか、なんかの昔話みたいだ。こうやって次々何か出てきて、最後は宝箱でも出るんだろか？
でもその手の話の宝箱、たいていお宝は入ってないから、その意

味じゃ鬱だ。

来た道戻って、また軌道バスに乗る。ルーフェイアは軌道バス気に入ったらしくて、楽しそうだった。

冬には珍しくぽかぽか陽気の中、今度は大学の門に着く。

「建物、どれだろう……」

「シエラよりデカいな」

大学なんて、俺たち全く縁ないワケで。

それでもルーフェイアの手前、カッコ悪いとこは見せたくなくて、精一杯虚勢張ってみる。

「どっかで聞いてみよう」

とは言うもののアテはないまま歩いてると、ここの学生らしい女の人がいた。すっごいグラマーだ。

思わず胸の辺りに見とれてから、慌てて首を振る。ルーフェイアの前で、何やってんだ俺。

「あの、すみません」

さっきの古道具屋もそうだったけど、気後れするのこらえて、話しかける。

「ここへ行きたいんですけど……」

女の人が、俺のメモを覗き込んだ。

Episode：23

浅黒い肌に黒い髪。香水らしい、いい匂いがする。
――って、ダメだろ俺。
いちいち気取られてて、ルーフェイアがいるのにみっともなさ過ぎる。

「あぁ、あの教授のとこ？　案内してあげるわー」
学生のお姉さんが気さくにそう言って、俺たちの前に立って歩き出した。
「ありがとうございます」
「いーのいーの。ヒマで大学来てみただけだし」

思わずルーフェイアと顔を見合わせる。大学ってのはシエラ以上に勉強するんだと思ってたけど、違うんだろか？
ともかく遅れないように、お姉さんの後ろを2人でついていく。
広い庭を歩いて、図書館だのらしいところを過ぎて、やっと俺たち建物へ入った。

「ハイ、ミラダ、後ろは新しい彼氏？」
友達らしい人から、なんか凄いことを言われる。

「そんなわけないでしょー。だいいちそれじゃ、こっちの美少女どーなんのよ」
お姉さんは慣れっこらしい。平然と返して続けた。
「知り合いの子なんだけど、大学見てみたいっていうから、連れてきたのよ」
上手いこと作り話して、俺たちの頭をお姉さんが撫でた。

「へぇ、偉い子たちねー」
「でしょでしょ」
学院でもそうだけど、こうなるとルーフェイア、完全にぬいぐるみか人形状態だ。あっさり捕まって抱っこされてる。
「やぁん、この子かっわいいー！　持って帰っちゃダメ？」
「ダメ！　あたしが連れて帰るんだから」
それは誘拐じゃないかと思いつつ、抱きしめられてるルーフェイアが羨ましかったり。
ってか、俺が代わりたい……。
そこまで考えてから、俺また頭を振った。何考えてるんだ。
「あの、部屋は……」
盛り上がってるお姉さんたちに勇気出して言うと、はっとした感じで顔を上げた。忘れてたっぽい。
「ごめんごめん、可愛いからつい。行こうか～」
可愛いとなんでそうなるのかは謎だけど、それ以上は訊かなかった。っていうか女子のこういうの、訊いてもたいていい、余計謎が深まるだけだ。
昇降台に乗って、３階で降りる。
「これ、太鼓……？」
ルーフェイアの言うとおり、廊下の奥からそんな音が聞こえてた。
「あー、まーた教授やってる」
なんか叫び声まで聞こえてるのに、お姉さんはそう言って、へっちゃらな顔で歩いてく。
でもなんでだろう、なんかこう、この音聞いてるとステップ踏みたくなる。

Episode：24

「教授！　お客さん！」
ドアを開けてお姉さんが大きな声で言うと、ぴたっと音がやんだ。
恐る恐る、その影から中を覗いて見る。

――ここ、どこですか？

まっさきに思い浮かんだのは、その言葉だった。
楕円の黒い板に目鼻の穴あけて、極彩色で彩った仮面。頭に着けた長い角。全身は緑の葉っぱで覆われて、手には巨鳥の翼よろしく羽がつけられてる。
ほかにもフェイスペインティングした人たちが、太鼓を前にして何人も並んでた。

「いやぁ、ニルギアのお客が来るって言うから、歓迎しようと思って」
緑の怪人が言いながら、こっちへ来る。

「ミラダ君、それでお客は？」
「あたしの後ろで固まってますけど」
緑の怪人――これ教授らしい――が、ドアまで来て覗き込んだ。
ルーフェイアが縮こまって、お姉さんの背中に張り付く。
ここは俺が、と思って前へ出ようとしたら、お姉さんが教授の頭をげんこつで殴った。

「まったく、こんな小さい子怖がらせてどーすんですか！」
「や、しまった、すまんすまん」
怪人が仮面に手を伸ばして脱ぐ。

下から出てきたのは、赤い髪に灰色の瞳の、どこにでも居そうなオヤジだった。ルーフェイアがやっと落ち着いたらしくて、ほっと息を吐く。

「ほんと、教授ったら人騒がせなんだから」
「いやいや、ニルギアの珍しい指輪が見られると聞いて、嬉しくてねー」
なんか俺、大学の教授ってすごく立派な人だと思ってたけど……音を立ててイメージが崩れてった。
だって、これじゃただの変人だ。

「で、指輪はどこかな、お譲ちゃん」
訊くようすがまたまた、どこからどう見ても変質者風味だったり。これにはさすがのルーフェイアも、及び腰だ。
それでも健気に、彼女がか細い声で言う。

「あの、えっと……あたしじゃ、ないです……」
「なんとっ！」
大声で言われて、ルーフェイアが首をすくめた。

「ご、ごめんなさい！」
まずい、これじゃ泣く。
「それ、俺です！」
急いで間へ入って、俺は言った。

「指輪、俺が持ってますから」
「……なんだ、ボウヤのほうか」
教授の、あからさまに落胆した顔。

Episode：25

「あの……？」
「あぁ、天は私を見放したのか！　このように美しい少女が、我が謎に助言をもたらしたと思いきや――男とは！」
ゴチンと盛大な音が響いて、教授が頭を抱えてしゃがみこんだ。

「痛いじゃないか、ミラダ君」
「そのまま永遠に寝ててもいいですよ？」
唖然とする俺たちに、お姉さんが向き直る。

「ごめんね、この人研究ばっかりで、ちょっとおかしいの。でもほら、危害は加えないから」
危害を加えないとか、まるでどっかの魔獣扱いだ。ってかこんなのが生息してるなんて、頑張って大学行ってみようかとも思ってたけど、考え直したほうがいいかもしんない。

「で、指輪持ってきたってホント？　見せてもらっていいかな？」
「あ、はい！」
間近にお姉さんの顔と胸が迫って、ドキドキしながら指輪を差し出す。

「へぇ……たしかに古そう。銀かな？　文字はこれ、ニルギア西部のティティ文字みたいだね」
さすがお姉さん、すらすらと口にした。
「どれ、見せたまえ」
興味ひかれたらしくて、教授が――緑の格好やっぱヘンです――手を出す。

「壊さないでくださいよ」
「こんな貴重なものに、そんなマネをするわけがなかろう」
言いながら教授が手にとって、声を上げた。
「なんとっ！　これは噂に聞いた、部族の証ではないかっ！」
なんだか興奮してる。
「実物をこの手に出来るとは、なんという幸運！　キミっ！　これはどこで手に入れたのかね？」
「え？　あ……あの俺、小さい頃から持ってて、よく分かんなくて……」
「こんな大事なことを、聞かされていないとは！」
教授がまた叫んだ。なんか何でも極端な人だ。
「では、キミのご両親はどちらかね？　ぜひ話を聞きたいのだが」
「あー、死んじゃったんでムリです」
それまで大げさに騒いでた教授が、ぴたりと動きを止める。
「では、キミは……？」
「シエラの本校生です。親居ないんで、どうにかそこで」
部屋の中が静まり返った。俺とかルーフェイアはなんとも思ってないのに、この人たちにはショックだったみたいだ。
「そうか、キミも犠牲者だったのか……」
「はぁ？」
教授は訳知り顔だけど、俺からしてみりゃ意味不明だ。てか、勝手に犠牲にして欲しくないし。

Episode：26

そんな俺の様子に、教授は頷いた。
「知らないなら、それでいいのかもしれんな……」
「だから、何がです？」
なんかちょっとイラっと来て、声がトゲっぽくなる。
「あぁすまん、こんな言われ方をされたら、誰だって腹が立つな」
また頷いて、教授が俺に訊いた。
「キミはニルギアのことを知っているかい？」
「えっと……」
なんだか急に授業風になって、ちょっと緊張する。考えてみたら俺、ニルギアの血を引いてるらしいのに、ほとんど知らなかった。
「たしか、内戦が多くて……貧しい、って」
「その通り。ちゃんと知ってるね、いいことだ」
微妙な褒め方をしたあと、教授が続ける。
「ニルギアでは戦って勝つと、相手を奴隷にする習慣があってね」
出てきた言葉に、自分でも顔が引きつるのが分かった。そんなこと、俺の故郷でやってるなんて。
俺の表情に気づいたらしくて、教授が慌てて言った。
「あぁ、キミが想像してるのとは少し違う。きちんと取り決めが合って、対価を払えば無罪放免だし、期間も数年だよ。まぁ、賠償みたいなもんだ」
「そうなんですか……」
口ではそう言ったものの、すんなりは納得出来ない。死んだ親が

犯罪者だって言われたような、イヤな感じだ。
と、そこまで黙ってたルーフェイアが、口を開いた。
「あの、そのやり方だと……期日が過ぎたあと、困りませんか？」
何言ってるんだかイマイチ意味がつかめなくて、ルーフェイアの顔を見る。教授も同じだったみたいで、彼女に問いかけた。
「困る、というと？」
「えっと、その……仮に無罪放免でも、土地が……だから土地とか、もうないですよね？　たいてい、取られますから」
「あぁ、そういう意味か。さすがシエラの本校だけあるな、鋭いもんだ」
教授が感心する。
「お嬢ちゃんの言うとおり、戦って負けたら土地は取られる。が、これも一時期だ。奴隷でなくなれば、自分の手に戻るんだよ。それも、元の状態に戻してもらってね」
「え、じゃぁ、何のために争いを……？」
俺もルーフェイアと同じことを思った。
だいたいが戦争だのってのは、自分が権力握りたいとか、領土が欲しいとか、まぁそんなとこが原因だと思う。
なのに取った土地はあとで返して、奴隷にしたのも居なくなっちゃうんじゃ、正直やる意味がない。

Episode：27

教授が出来のいい生徒を見つけたみたいに、ニコニコしながら答えた。

「それこそが、ニルギアの伝統法のいいところなんだ。やっても意味がない、それこそが狙いなんだよ」

教授は得意気だけど、俺らは首をかしげるばっかだ。

「つまりだ。負ければ奴隷だし、土地や蓄えを取られる。だが勝っても得をするのはせいぜい数年で、下手をすれば返すときに損をする。ここまでは分かるね？」

「はい……」

説明そのものは分かったけど、なんだか全体像が見えてこない。

そんな俺たちに、教授が意味ありげな微笑を浮かべながら言った。

「要するにこれは、『戦わせない』ための法なんだよ。すごいだろう？」

「あ……！」

思わず声を上げる。これ考えた人、マジですごい。

「勝っても得をしない戦いなんて、しても意味がないだろう？　だからニルギアでは別の方法、族長どうしの話し合いや、荒野での決闘みたいなもので争いを片付けてたんだ」

きっと、平和なところだったんだと思う。広がる草原でみんな、のんびり狩りや畑仕事をしながら、暮らしてたんだろう。

「あぁ、先人の智恵に守られた、麗しのニルギアよ！　恵みの大地よ！」

教授が両手を挙げて天を仰ぐ。

なんでこの教授が、こんなにニルギアが好きなのかは分からない。けど、悪い気はしなかった。

「豊かなところなんだ、ニルギアは。キミもぜひ、いつか行くといい」

「はい！」

写真で見ただけの、どこまでも続く大平原。あそこへ行って見たいと思う。

「あの……でも今は、内戦なんかが、ひどかったかと……」

ルーフェイアの声が、俺の夢想を破った。彼女は戦場あがりなだけあって、現実派みたいだ。

「そういう法が生きてたら、内戦……しなくないですか？」

「ほんとにお嬢ちゃんは鋭いねぇ」

感心する教授に、当たり前だろと内心突っ込む。なんせシエラの本校の、それも学年主席だ。そこらの勉強できるヤツ集めた学校にだって、引けは取らない。

まぁ俺が自慢に思ったって、しょうがないんだけど……。

「ニルギアはずっとこの法に守られて、均衡を保ってきたんだが……それが１５０年ほど前に、破れたんだ」

「えっとそれ、どういうことですか？」

教授にとっては当たり前の知識なんだろうけど、詳しいこと知らない俺には意味不明だ。

「ニルギアは平和で豊かだったから、あまり武器や魔法が発展しなかったんだ。昔のままで、十分暮らせたからね」

なんとなく分かる気はした。人間ってホントに困らないと、必死にならない。

それに技術が発展するのは、いつだって戦争の時だって言う。きっと死にたくないから、それこそ必死になるんだろう。

Episode：28

「それが、どうして？」
「北方……まぁ早い話がアヴァン大陸の各国なんだが、そこが武器を持ち込んだんだ」
教授が言うには、そうやって武器を持ち込んだ上で、対立を煽ったんだって言う。

「しかも巧妙なことに、ひとつの部族にだけ武器を売ってね。さらにその対価を、負けた部族の捕虜で受け取ったんだ」
「え……？」
予想を超えた話に、頭が付いていかない。

「そうだね、ちょっと難しいかな」
教授が優しい顔になって、分かりやすく説明し始める。この辺はやっぱり「先生」だ。

「ニルギアの法が生きてたのは、どこも同じような軍事力だったからなんだ。仮に破ったら、周囲の部族に連合されて二度と勝てなくなるのもあって、みんな守ってた。ここまでは分かるかな？」
「あ、はい」

戦争は基本的に数で決まるから、周り中が敵になったら勝てない。だからヘンなちょっかい、出さなかったってことだ。
これは今でもよくある話だから、分かる。

「じゃぁ、質問だ。その状態で１つの部族だけが、どこにも負けないような圧倒的な軍事力を持ったら？」
「あ……！」

やっと意味が分かる。
本当は戦いを仕掛けたいのに戦力が足りなくて出来ない国が、圧倒的な軍事力を持ったら。

「やりたい放題、ってことか……」
「そのとおり」
教授が沈痛な表情で頷いた。

「武器や魔法を得た野心家が、次々と周囲と戦って、土地と捕虜を得る。しかも捕虜は遠い国へ売ってしまうから、戻ってくることもなくて、土地が取り放題だ」
その野心家が誰かは知らないけど、それこそ濡れ手で粟だったろう。武器は捕虜と交換で手に入るし、土地も一緒に手に入るんじゃ、強くなる一方だ。

「近隣の部族が連合して襲ってきても、魔法や武器がなくては、勝ち目はないしね」
「ですよね……」
今だってルーフェイアみたいな優秀な兵士が、戦局をひっくり返すことがある。ましてや相手が昔ながらの槍と弓だけじゃ、それこそただの虐殺だろう。

「似たようなことが北のいろんな国の手で、全土で引き起こされてね。あっという間にニルギアは、滅茶苦茶になってしまったんだよ」
聞いてるだけで、息苦しくなる。
昔々から変わらず平和にやってきた生活が、そんな形で壊されるなんて。考え付いた連中は、魔獣以下だ。

Episode：29

「だから、今も内戦なのか……」
「おおむねそんなところだ。ニルギアじゃ血縁をとても大切にするから、遠縁とはいえ血の繋がった人を売られた恨みは、生半可なものではなくてね。だから争いがいつ収まるか、見当も付かない状態なんだ」

なんだか、立っているのも辛くなる。
教科書で習って覚えた話の裏に、こんな深刻なものが隠されてるなんて、思いもしなかった。

「アーマル君……大丈夫？」
「あ、うん、ごめん……」

ワケが分からない。
イマドは出身がアヴァン大陸だし、ヴィオレイはワサールだ。ルーフェイアも肌とか髪の色から、たぶんその辺だろう。この教授だって、どう見てもアヴァン大陸かユリアス国の出身だ。

でも、こんなふうに普通に一緒にやれる。笑ったり泣いたり、俺とどこも違わない。
それなのに、武器売りつけて代わりに人を買う連中が居たり、肌の色が違うだけで襲ってくるヤツが居たり……。

「済まない、ちょっと話が深刻すぎたね。これを飲むといい」
教授が謝りながら、俺にカップを差し出した。

「ニルギアの薬茶だよ。飲むと気持ちが落ち着くし、元気が出る」

「すみません……」
受け取って、口をつける。不思議な香りが広がって、不意に涙がこぼれた。
ルーフェイアの手前、こんなみっともない真似したくなくて必死にこらえようとしたけど、こらえきれない。

「どうしたんだい？」
教授の優しい声に、やっと答える。

「これ、おふくろが……」
いつだったかも、どこだったかも思い出せないけど、この香りだけははっきりと覚えてる。カラカラに乾いた大地を歩き続けてたとき、おふくろが少しずつ、俺に飲ませてくれた。

「香りっていうのは、意外と深く記憶に残るからね」
教授に頭撫でられて、小さい子みたいで恥ずかしいのに、安心してる自分。分かってくれる人が、今ここに居てよかった。

「さ、飲んで。それとせっかくだからこの指輪、ちょっと詳しく見てみよう」
「……はい」
教授が拡大鏡出して、指輪を見始める。

「うん、ミラダ君の言うとおり、ニルギア西部のティティ文字だね。訛りから見て、ゴルンデノ平原南部だろう」
聞いたことのない単語ばっかりだ。

「あの、それで何て書いてあるんですか？」
やっと落ち着いてきて、訊くだけの余裕が出来る。
「うむ、今読むから待ってくれ。えーと……」

教授が指輪に顔を近づけた。

Episode：30

「偉大なるドラバ＝ンドクの――なんだって！」
素っ頓狂な声が上がる。リング部分の細かい文字は、とんでもない内容だったらしい。

「大変だ、ティティ王国の開祖じゃないか！　ドラバ＝ンドクの娘、エンマ＝オルニテの子にこれを贈る。末永く栄えんことを。あぁ、だから豊穣神ネラマニの印なのか」
教授が独りで納得しまくりだ。

「えっと、その、それって……？」
「つまりだね、この指輪はティティ王国を作ったドラバ＝ンドク王の末娘、エンマ＝オルニテの子供――つまり王の孫に、贈られたものなんだよ」
かなり興奮してるらしくて、教授の声が上ずってる。

「――それ、ホントですか？」
でも俺は、イマイチ信じられなかったり。そりゃ本当ならいいなぁ、とは思うけど。
シエラに居ると現実的な連中ばっかのせいか、この手の夢はどっかへ置き忘れる感じだ。うっかり信じて騙されただの、殺されかかっただのって話ばっかり聞くから、どうにも用心深くなる。

「まぁそりゃ、細かく調べてみないと分からないが……本物の可能性は高いと思う」
教授のほうは、ちょっと自信ありげだ。

「ほら、この台座の裏を見てごらん？」

「この模様が、なんかあるんです？」
小さいくせにやたら複雑な模様が、裏には刻まれてる。今まで気づいちゃいたけど、これに意味があるなんて思ったことなかった。
「これは、ンドク王の印なんだ。他にも王や王子、王女は自分の印を持ってる。ただ一般には知られてなくて、王家直属の彫金士が一子相伝で伝えてた」
「へぇ……」
こんな小さな指輪から、一気に歴史のロマンの世界だ。
「滅多にこれは刻まれない。下賜品なんかには、よほどじゃないと付かないね。けど、この指輪にはその印がある」
「じゃぁ俺、もしかして……その子孫ですか？」
なんだかよく分かんないけど、マジでエラいことになってきた気がする。
「だろうね。直系かどうかは分からないが、どこかで繋がってるんだろう」
壮大な話だ。俺と遠く血の繋がる先に、そんな王が居るなんて。
「あと何か、分かりますか？　例えば、その王家の末裔が、他にどこにいるかとか」
「うーん、それはどうだろう」
教授がちょっと、考え込む。
「ティティ王家はとうに滅びてるし、ニルギアが混乱した際に各家系も滅茶苦茶になってるから、今辿るのは難しいんだよ。実際キミも、この指輪の由来さえ知らなかっただろう？」
たしかに言われてみればそうだ。

Episode：31

「じゃぁ、もう俺以外誰も……？」
せっかくいろいろ分かったのに、他に居ないってのはちょっと悲しい。
そんな俺に、教授が言った。

「いや、そんなことはない。血は繋がってないかもしれないが、ゴルンデノ平原南部出身の人なら、このケンディクにも居るよ」
「ほんとですか！」

なんせシエラに居るくらいだから、身寄りがないのは当たり前として……俺の場合他の生徒と違って、出身が遠すぎて同郷にも会ったことない。
なのに、こんなに近くに居たなんて。

「あの、どこの誰ですか？　どこに住んでますか？」
会ってみたかった。
イマドとかヴィオレイは友達だけど、同郷ってのはまた違う。血とか土地の繋がりって、そういうもんだ。
けど教授は、思案顔だ。

「あの、教授？」
「いや、居ることはいるんだが……その、住んでる場所がアレでね。東地区なんだよ」
「東地区……」
このケンディクでも、治安がよくないので有名なとこだ。
でも、会ってみたい。

「場所、教えてください。俺、行ってきます」
「いやその、教えてあげたいのは山々だが、子供が行くようなところじゃないだろう」
教授は及び腰だ。でも俺は、どうあっても行くつもりだった。

ケンディクの東地区は、たしかに治安は他所に比べたら悪い。でもすぐ近くにある、シエラの分校の生徒が、依頼されて見回りに出てる。
逆に言うなら、せいぜいそれで済むくらいの荒れ方だ。本校のAクラスなら、気をつければ何とかなる。

「あの、あたしからも、お願いします」
今まで黙ってたルーフェイアが、教授の前へ出た。

「教授は、あんまりご存知ないかもしれないですけど……学院生のほとんどは、こういうこと、とても気になるんです」
ルーフェイア、やっぱいいヤツ過ぎる。一緒に居られる俺、どう考えてもメチャクチャ運がいい。

「えーとキミ、そんな瞳で見上げないでくれ！　私は美少女に弱いんだ！」
瞬間また盛大な音が響いて、教授が頭を抱えてしゃがみこんだ。
「まったく、いつもそう変態発言ばっかりして！」
お姉さん、激怒してる。

「この子たち、シエラの本校生なんでしょう？　じゃぁ大丈夫ですよ。それに教授、もしかしたら何か新しい発見、あるかもしれませんし」
「それもそうか」
教授があっさり言いくるめられた。でも、いいのか？

「よし、じゃぁ先方に連絡とってみて、居たら私も一緒に行こう。それでいいかね？」
「はい！」
何か分かるかもしれない、そんな期待で、俺は返事した。

Episode：32

◇Ｒｕｆｅｉｒ

車窓を風が流れていく。
乗ってる路線は、さっきと同じだ。だから見える建物も同じだ。
ただメンバーは違って、あたしとアーマル君のほかに、教授とあのお姉さんが加わってる。

――今日、何回軌道バスに乗ったかな？

ふとそんなことを思った。行ったり来たり、きっと足したらけっこうな距離だ。
でも、ちょっとした旅行みたいで楽しい。遠出しなくてもこんなふうに楽しめるんだと、目から膜が取れた感じだ。
今度はイマドと来てみよう、と思ってるうちに、軌道バスが何度目かの減速をした。

「さて、次で降りるよ」
「はい」
さっきより少し手前の停留所で、教授に連れられて降りる。

「この先なんですか？」
「そうだよ。ただ、ちょっと歩くね」
どうやら東地区のけっこう奥のほうまで、行くみたいだ。

「そうだキミたち、私からは絶対離れないでくれ。いいね？」
「あ、はい……」
教授の真剣な顔に思わずうなずいてはみたものの、意味が分から

ない。
あたしの表情に気づいたんだろう、お姉さんが補足してくれた。
「ここね、余所者に厳しいの。でも教授は長年通ってるから、一緒に居れば大丈夫。変態だけど」
「最後は余計だな」
教授が憤然とする。

「男たるもの人間たるもの、美しいものには惹かれるのが道理！」
瞬間、ごつんといい音がして、また教授がしゃがみこんだ。
「それを変態って言うんです！　さ、あなたたち、行こうか」
ほんの今「危ない」と言ったのに、お姉さん、さっさと行こうとする。

「こ、こらミラダ君、私を置いていくんじゃない！」
「ならもう、変態発言はしないでください」
この二人、けっこういいコンビかもしれない。

「やれやれ、近頃の若い子は凶暴でよくないな。いいかいお嬢ちゃん、ああいうふうになっちゃイカンぞ？」
「教授、もっかい殴りましょうか？」
ニコニコしながら言うお姉さん、ちょっと怖い。

「冗談だよ冗談、うん。さて行こう」
もう殴られるのは嫌なんだろう、今度は教授、先に立って歩き始めた。

「この辺は昔から、港で働く労働者の住まいでね」
教授はそう言うけど、港そのものとはだいぶ雰囲気が違う。どちらかというとシーモアたちの故郷の、ロデスティオのスラムみたい

な感じだ。

Episode：33

あとちょっと気になったのが、あたしや教授みたいな肌と髪の色の人が、少ないことだった。
全く居ないわけじゃないけど、かなり少数派だ。だからここじゃ、アーマル君やお姉さんのほうが、溶け込んでて自然に見える。
面白いな、と思った。ちょっと色の組み合わせと、そこに居る人数が違うだけなのに、こんなにも雰囲気が変わる。

「なんて人なんですか？」
アーマル君、気になるんだろう。さっきから教授に、質問ばっかりだ。
「もう８０歳過ぎた方でね、イファさんと言うんだ」
すごいな、と思う。

シュマーの一族は、基本的に短命だ。血が薄ければ人並みだけど、ある程度以上に濃いと、３０～４０代でだいたい亡くなる。
まぁその分、成長も早いのだけど……。

あたしなんてどういうわけか人より育つのが遅いから、幾つも年下の子のほうが、よっぽど大きい有様だ。
どちらにしても、あたしたちの倍も生きるんだから、普通の人はいろいろ有利だと思う。

「なんでもイファさんは子供の頃に捕虜になって、エバスの隣国、ネーレアムに連れてこられたんだそうだ」
教授やアーマル君の顔が曇る。
捕虜になって連れてこられたってことは、つまり売られたってことだ。そのイファさんがどんなところへ売られたか分からないけど

……けっして楽じゃなかっただろう。

「でも、どうしてケンディクに？」

「エバスとネーレアムが小競り合いになったときに、ドサクサにまぎれて逃げ出したらしい」

そのあと仕事を探しながら東へ流れていって、最後にこのケンディクに居ついたのだという。

「ここはほら、観光地だし保養地だから、世界中から人が集まるだろう？　だから暮らしやすくていいそうだ」

「ですよね！」

アーマル君が勢い良く言う。

あたしはまだここへ来てから日が浅いから、彼ほどこの町に思い入れは無い。

でもたしかに、いい町だと思う。食べ物は豊富だし、冬は暖かい。夏はそれなりに暑いけど、目の前が海だし風もあるから、けっこう何とかなる。

これから会いに行くイファさんも、そんなとこが気に入ったんだろう。

と、気配を感じた。

他の人は気づいてないけど、明らかに複数が、それも前後からこっちを伺っている。

――どうしよう。

その気になれば、あたしひとりで何とかなると思う。ただそれは、周りを考えないで全力で行った場合だ。

もし実際にやったら、間違いなくアーマル君たちを巻き込む。

Episode：34

誰を、何の狙いで。そう考えてるうちに、向こうが動いた。二桁もの男たちが、あたしたちを取り囲む。
「何だねキミらは」
教授の問いに、1人が答えた。
「そこの白いの二人、俺たちと来てもらう。無駄口を叩いたら殺す」
簡潔な説明。でも内容はあんまり楽しくない。
「理由くらいは、聞かせてもらいたいが？」
「黙れ」
言って男たちが、一斉に銃を向ける。
（ルーフェイア、どうする？）
アーマル君が小声で聞いてきた。
（従って、成り行き見て、脱出のほうが早いと思う）
ついて来いと言うからには、連れて行かれる先はアジトかどこかだろう。そういう場所なら遠慮なく破壊出来るし、連れて行かれる間に防御策も施しておける。
問題は分断されたときだけど……あたしと教授だけなら、引き離された時点で反撃に出れば、どうにかなるはずだ。
「やれやれ。じゃぁこのお嬢ちゃんだけでも、返してやってくれないか？」
「ダメだな。2人とも来い」
ごくふつうの、子供には手を出さないとか、そういう話は通じない相手みたいだ。

とりあえず、教授の手を握りながら言う。

「あの、あたし、学校があそこなので……」

教授はあたしの顔をじっと見て、意味に気づいたみたいだった。

「そうだったな。――ミラダ君、キミはその子を連れて、先に行ってくれ」

「分かりました。ほら坊や、来て」

お姉さんがアーマル君を連れて、足早に立ち去る。

意外だけど、こういうことってけっこうあるらしい。教授もお姉さんも、対応が慣れすぎだ。

2人が角を曲がるのを見届けて、教授が口を開いた。

「で、どこへ連れて行く気だね？」

「いいから来い！」

周りを取り囲まれたまま、乱暴に後ろから小突かれて、仕方なく歩き出す。

「少しは思い知れ！　俺らのオヤジやジイさんは、お前らにこうして連れてこられたんだ！」

1人がそう言ったけど、正直何かが間違ってると思った。

お父さんやお爺さんが捕虜として連れてこられたのは、その通りだ。でも、この人たち自身じゃない。

たしかにいろいろ、不満も不遇もあるだろうけど……それをこういう形で向けられると、納得はいかなかった。

ただこの人たちに、それを言っても無駄だろう。

そう思って、教授と並んで、黙って歩く。

Episode：35

「よし、止まれ」
そう言われたのは、ずいぶん歩いてからだった。たぶんシエラの本島横断より、歩いたと思う。
あまり綺麗じゃないビルの谷間の、ちょっとした空き地だ。

「さぁて、お前らどうしてやるか」
「別にやるのは構わんが、私に何かすると、後でジュマ君に酷い目に遭わされるぞ」
教授が平然と、煽るようなことを言う。

「ジュマ君は少々気が短いからな。だが友達思いだ」
「お前、なんでジュマさんの名前を……」
どうやらジュマさんというのは、この辺の有力者らしい。もしかするとロデスティオのダグさんとかみたいに、一帯を束ねてるのかもしれない。

「なんでと言われてもね。知ってるものは知ってるんだから仕方ない」
さすがに眉をひそめる。これじゃ完全に挑発で、事態が荒っぽくなる一方だ。
もちろんあたしはそれでも、何とかなるだろうけど、教授の身の保証が出来なくなる。
かといって、ここで忠告することも出来ないわけで……。

「どうせハッタリだろ。どっかで名前聞いて、イキがってるだけさ」
グループの1人が、ある意味もっともなことを言う。

「だいたい、ジュマさんにこんな白い知り合いとか、居るわけねーよ」
「それもそうだな」
話を聞きながら、なんでだろうと思う。白だの黒だの、そんなの日焼けでもしたらすぐ変わる。だいいち教授やあたしが髪を染めて肌を塗ったら、すぐ色なんて分からなくなるのに。

そんなことを考えているうちに、向こうがじり、と前へ出た。それぞれが思い思いの武器――たぶんそのはず――を出して、こっちに視線を向ける。
あたしも動けるよう、少しずつ体制を変えて、教授の前へ出て……何か怖気を感じて、思わず振り返った。

「きょほほほほほほっ、きょっほー！」
ワケの分からない叫び声に、一瞬動けなくなる。
――緑の、怪人。
さすがに混乱する頭を必死に静めて、状況を把握した。

この怪人、たぶん教授だ。たしかあの緑の服（？）は脱がずにコートを羽織ってたし、この仮面もさっき見た。だから間違いない。
けど、なんでこんなときに、こんな格好でこんな雄叫び……。

「なっ、なんだこいつっ！」
「来るなーっ！」
でももっと戸惑ったのは、連れてきたグループのほうだ。予想とかそんなものを遥かに超えて、異形の何かに出会ったみたいに怯えてる。

「ふほほほほ、ニルギアの誇り高きデワウ族、その屈強なる狩人と共に野を走り、聖なるロワメナ神の姿を許された私に、かかってく

るがいい！」

教授は絶好調だ。

Episode：36

「や、やべぇぞコイツ！」
グループの1人が叫ぶ。あたしも同感だ。
というかさっきから「大学教授」のイメージが、音を立てて崩れてってる。天才と馬鹿は……ってよく言うけど、実態はそれ以上にしか思えない。

「こないのなら、こちらからだ。ロワメナ神の従者に手を出した報い、その身で思い知れ。行くぞ、きょっえーっ！」
怪鳥みたいな叫び声を上げながら、教授が手近な1人に踊りかかった。

――あ、案外強いかも。
その辺の若い人より動きが速いし、相手の動きも良く見えてる。
教授はその間に頭突きで1人を昏倒させて、また雄たけびを上げた。

「ひひゃひゃ、弱い、弱いぞ文明人よ！　我らロワメナ戦士の敵ではないわ！」
教授だってケンディクで暮らしてるのだから、十分文明人だと思うのだけど、その事実は無かったことになってるらしい。
可哀想なのは、あたしたちを連れてきたグループだ。あまりの事態に、腰を抜かして座り込む人まで出てる。
それでも2、3人、後ずさりながら逃げ出した。

「けきょっ、逃げるとは卑怯な！　食らえっ！」
教授が手を突き出すと、広場の出口に電撃が炸裂する。
逃げようとしてた何人かが、驚いて尻餅をついた。

「きょーっきょっきょっきょ、思い知ったかっ！」
響く哄笑。
たぶん何かの儀式と一緒で、教授はあの仮面をかぶることで、一種のトランス状態になるんだろう。
ただそれを差し引いても、まったくの無詠唱であの威力なんて反則だ。

「たっ、助けてくれっ！」
グループのほうは、気の毒なくらい怯えてる。きっと一生のトラウマになるに違いない。

「けきゃきゃ、そぉれ、天の裁きじゃっ！」
台詞に嫌なものを感じて、とっさにグループと教授の間に入って、防御魔法を唱える。
「ルス・バレーっ！」
「そぉりゃっ！」

天から文字通りいかずちが降り注いだけど、間一髪で防御魔法が間に合う。こんなのまともに食らったら、黒コゲになるところだ。
でも魔法の範囲を広げたせいで完全には防ぎきれなくて、グループの男たちは痺れてひっくり返ってる。立ってるのは、元からある程度魔法を防げるあたしだけだ。、

「きょほほほほほ、神は偉大なり！」
何かが絶対間違ってると思うけど、教授は満足したみたいだった。
けど周囲を見回してた視線が、あたしで止まる。

「きょっきょっ、その美しさ、敵といえど守ろうとするその慈愛、もしやネラマニの化身！」

「え……」
教授、何かおかしなモードに突入したらしい。

Episode：37

「あの、あたしはそんなのじゃ……」
「おぉ、なんと奥ゆかしい！　女神殿、どうか我に祝福を！」
言って教授が、飛び掛ってというか抱きついてというか、ともかく襲い掛かってくる。

「ゼーレ＝シュラーフ！」
思わず全力で、眠りの魔法をかける。
「ひょぉ、これが女神の……」

そこまで言って、教授が倒れこんだ。トランス状態だからダメかと思ったけど、何とか眠ってくれたらしい。
それから急に心配になった。
何しろあたしの、全力の魔法だ。普通の人なら、最悪だと二度と目覚めないくらい威力がある。

「あの、教授……？」
恐る恐る近づいて、突付いてみる。
「ふみゃむぅ、麗しき女神……」

大丈夫そうだ。少なくとも寝言を言ってるから、昏睡ってことはない。
ほっと胸を撫で下ろしながら辺りを見回すと、連れてきたグループの人たちが、まだ痺れてるみたいで座り込んでた。

「あの、大丈夫ですか？　回復魔法、要りますか？」
「あの化け物を、一撃で……」
なんだか全く違うことを言われる。

「えっと、その……立てますか？」
「え？」
相手の人たちが、唖然とした顔になった。
「立てますか？　立てなかったら、あの、あたしで良ければ回復魔法……」
「え、あ、いや、立てる」
グループの人たちが、次々と立ち上がる。どうやら問題なさそうだ。
「えっと、教授が起きないうちに、逃げたほうが……」
「そ、そうだな」
さすがにもう、何かする気はなくなったらしい。みんな大人しく帰ろうとする。
「あんな化け物、鎖つけときゃいいのに」
「まったくだ」
口々にそんなことを言ってるのは、きっと怖かったからだろう。
と、1人がこっちを振り返った。
「あんた、白いくせになんで、俺らを助けた？」
「え、何でって……だって、助けるのって当たり前……」
自分でも何を言ってるのかよく分からない。ただ危ないと思った瞬間身体が動いてしまったし、だいいち目の前でこういうことがあったら、助けるのが普通じゃないだろうか？
なかなかすっきりした答えが出なくて、悩んでるあたしに、その人が笑った。
「ったく、危ねーお嬢ちゃんだな。まぁいいや、礼は言っとく」

あたしはお礼を言われた覚えがないのに、言ったことになったらしい。

Episode：38

「ルーフェイア！」
突然名前を呼ばれて、声の主を探す。
「あー、いたいた。大丈夫？」
さっき分かれたお姉さんとアーマル君が、他にも人を連れて来ていた。

「うわ、教授ったらこれ出しちゃったの？」
例の仮面を見ただけでお姉さん、何が起こったか分かったらしい。
「ねぇあなた、大丈夫だった？　何にもされなかった？」
教授が倒れてることは、気にならないみたいだ。

「何もって言うか、なんか、何とか女神の化身とか……それで、なんか飛び掛られて、思わず魔法を……」
「あらこれ、動力切れじゃなかったんだ」
教授、ひどい言われようだ。

「あたし……全力で、眠りの魔法、かけちゃって……」
「へー、今度あたしも教えてもらおうかな？　大人しくていいし」
お姉さん教授をよく殴ってたから、普段困らされてるんだろう。

「さて、今のうちに仮面を外してと」
言いながらお姉さん、仮面を外して、さらに教授をごちんと殴った。

「痛いじゃないか、ミラダ君」
「何言ってんですか、女の子襲おうとしたくせに」

それで起きる教授も教授だけど、お姉さんの言ってることも相当だ。

「何のことだ？　私は覚えていないぞ。仮面を被ったのは覚えてるが」

「だから、いつも言ってるじゃないですか。この仮面被っちゃダメだって」

「何を言う、これは偉大なるロワメナ神を象った、神聖なものだぞ！」

やり取りを聞いてるうちに、頭が痛くなってくる。

あたしたちを連れてきたグループのほうも、しばらく唖然と見ていたけど、こそこそと帰り始めた。

けど。

「お前ら、ちゃっかり逃げるんじゃない」

アーマル君とお姉さんが連れてきた、見知らぬおじさんが鋭く言う。

「じゅ、ジュマさん……？」

どうやらこの人が、さっき話しに出たジュマさんらしい。

あたしはなんとなく、もっと若い人を想像してたから、ちょっと驚きだ。

「何度か言っただろう。特にこの人には、むやみに手を出すなと」

「え、そうなんすか？」

ジュマさんという人、この一帯では相当力を持ってるらしい。もしかすると、何かの団体を率いているのかもしれない。

「まったく。知らないようじゃ困る。少なくともこの人は、俺たちの敵じゃないんだぞ」

「すんません……」
あんなに威勢が良かったのにグループの人たち、今はまるで、大人にいたずらを見つかった小さい子みたいだ。

Episode：39

「お前たち、俺が認めた人に手を出したんだ。どうなるか分かってるだろうな？」
ジュマさんの言葉に、グループの人たちが縮み上がる。

「その、俺らマジで知らなくて！　勘弁してください！」
「黙れ！」
その間へ、あたしは飛び出した。
腕を十字に組んで、拳を受け止める。

「どけっ！」
「イヤです！」
言い返す。

「なら、お前を先にやってからだ」
言ってることがメチャクチャだ。完全に手段と目的が反対になってる。
けどこの人は、そんなのどうでもいいらしい。

「俺に楯突いたのを、後悔するんだな！」
言いながら殴りかかってくる。教授も言ってたけど、ほんとに短気だ。というか、何も考えてないんじゃないんだろうか？

ただ、隙だらけだ。相当ケンカで鍛えたとは思うけど、まだちょっと甘い。
紙一重で避けて、この人が僅かに体制を崩したところで、むこうずねを強く蹴る。

「つっ……」
痛みで大きくできた隙を、あたしは逃さなかった。
がら空きになったわき腹へ、つま先を叩き込む。
「ぐっ……！」
さすがに蹴られたところを押さえて、動きが止まったところへ、あたしは抜いた小太刀を押し当てた。
「動けば、切ります」
「……」
ジュマさんから戦意が消えた。
「ったく、なんてお嬢ちゃんだ」
「すみません……」
思わず謝ると、ジュマさんが笑い出した。
「いや、いい。あんたの実力を見抜けなかった、俺が悪いからな」
もしかしてこのジュマさんという人、言葉じゃなくて拳で語り合うタイプなんだろうか？　今はやりあう前と違って、心が通じている気がする。
――でも、いいのかな？
あたしはたまたま実戦慣れしてたけど、そうじゃない人が相手だったら、どんなにいいことを言っても通じないままで終わりそうだ。
「まったく、ジュマ君は相変わらず短気だな」
「教授だって相当ですよ。あの時なんていきなり、仮面被りましたし」
思わず乾いた笑いが出る。なんでこの2人仲がいいのかと不思議だったけど、教授、あの仮面状態でジュマさんを蹂躙したんだろう。

そのジュマさんが、グループの人たちの方へ向き直った。
「お前たち、このお嬢ちゃんによくお礼を言うんだな。命拾いしたぞ」
「はいっ！」
なぜかみんながあたしの前に整列する。
「お嬢様、ありがとうございましたっ！」
一斉に頭を下げて、どこかのお店か何かみたいだ。

Episode：40

「あの、別に、いいですから……」
グループの人に言った瞬間、殺気を感じてとっさに動く。
後ろから迫る気配に、確認しながら体制を落として、肘撃ち。さらに悲鳴を上げながらたらたらを踏んだ、相手の下半身――これ誰？――を掬い上げた。
あたしに投げ飛ばされた誰かが、グループの列に突っ込む。

「じゅ、ジュマさん！」
名前を呼びながらみんな駆け寄ったとこをみると、ジュマさんの不意打ちだったみたいだ。グループの人たちがあっさり言うことを聞いて頭を下げたのも、今までによくこうして、相手を叩きのめしてたからなんだろう。

――ある意味、正しいけど。
戦闘もそうだけど、こういうのは試合じゃないから、要は勝てばいい。だから不意打ちは有効だ。あたしじゃなかったら、成功してただろう。
ジュマさんとやらは、唸ったまま動かない。とっさのことで余り手加減しなかったから、効いてるんだろう。

「やれやれ、ホントにキミたちは大人気ないな。こんな小さい子にまで、こんなことして」
「うるさいっ！　白い連中の子供なんて、信用できっか！」
グループの1人が、掃き捨てるように言った。

けどあたしとしては、この方が納得が行く。人の考えが、そんなに簡単に変わるほうがおかしい。

ただ問題は、このままだと延々、この人たちに尾け回されて襲われることだろう。撃退自体はそんなに難しくないけど、さすがにずっとは嫌だ。
仕方なく呪文を唱えようとして……男の人の悲鳴と、女の人の怒鳴り声が聞こえた。

「ばっかじゃないの、あなたたちっ！」
「い、痛てぇ……」
お姉さんが、教授をも撃沈する拳で、グループの人を殴りつけてる。

「メンツなんてつまんないものにこだわって、こんな小さい子襲って、怪我でもさせたらどうすんのっ！　というかね、自分たちの仲間の子がやられたら大騒ぎするのに、この子ならいいってどういうことっ！」
久しぶりに、ふつうの意見（？）を聞いた気がした。

「けど、だってこいつ、白いじゃな……ってぇっ！」
グループの人がまた殴られる。

「そうだからダメなのよっ！　ここはケンディクで、エバスなんかじゃないでしょっ！　だいいち街見てみなさい、白も黒も黄色も褐色も、みんなごちゃまぜじゃないのっ！」
お姉さん、凄い剣幕だ。

「色のせいにして、この馬鹿っ！　あんたたちのせいで、あたしがどんなに苦労したか分かってんの？　あんたたちが騒ぎ起こすたび、大学で言われなきゃなんないんだから！　努力が水の泡よ！」
今まで、よほど腹に据えかねてたらしい。お姉さんちょっと涙声だ。

Episode：41

けど、ジュマさんが言い返した。
「だから何だ？　大学？　それがどうした。努力だ苦労だって、お前がそうやったからって、誰かが仕事につけるのか？　赤ん坊が医者に行けるのか？」
言われてみればそうだけど、でも何かが違う気もする。
「俺たちに必要なのは、俺たちが自由に生きられる世界だ。だがお前は所詮、自分のために勉強してるだけだろう」
「それは……」
言葉に詰まったお姉さんの代わりに言い返したのは、アーマル君だった。
「いい加減にしろよ、いい年して！」
じろりとジュマさんに睨まれてもアーマル君、負けじと睨み返して続ける
「自由をってのと、この人の大学は別だろ！　ってか、その自由とやらの先陣切ってる人を、なんで責めんだよ」
「裏切り者だからだ」
なんか、考えもつかない言葉が飛び出す。
「裏切ってないだろ！」
「いや、裏切り者だ。まだたくさんの仲間が困ってるのに、自分だけが抜け出すんだからな」
それはおかしいんじゃないかと、さすがに思う。こんなふうに足を引っ張ってたら、抜け出せるものも抜け出せないんじゃないだろ

うか。
アーマル君も、同じことを思ったみたいだった。
「ばっかじゃね？　この人みたいに抜け出る人が増えるから、他も続けるって思わないのかよ？　てーか、先陣の突破を妨害する仲間とか、戦場なら銃殺モンじゃん。部隊全部死んじまうだろ」
こういう言われ方は、したことなかったんだろう。ジュマさんが黙る。
アーマル君が畳み掛けた。
「つかそういうことなら、俺も裏切り者？　俺、親死んじまってシエラの本校だけど、俺が悪いんだ？　それとも、辞めて野垂れ死ねって言うのかよ！」
答えはなかった。当たり前だ。
アーマル君のご両親が亡くなったのが、アーマル君のせいなわけがない。むしろ彼は被害者だ。そしてシエラの本校でやっていられるのは、それだけの力量があるからだ。
それを裏切り者だなんて、間違っても言えないだろう。
「……俺は、許せない」
沈黙を破って、ジュマさんが口を開いた。
「俺は努力した。西の大陸で学校もちゃんと行った。大学もだ。なのに――」
悲痛な声。
「なのに、俺が黒いってだけで教授の連中、点を下げやがった。学費稼ごうとしたときも、俺が黒いってだけで門前払いだ。分かるか？　いつもいつも、何もかもだ！」
激昂。いったいどれほどのことが、昔あったんだろう？

Episode：42

「変えるんだ。黒いからってこんな目に遭うとか、無くすんだ。こんな世界、冗談じゃねぇ！」
その叫びを、アーマル君が遮った。

「るっせぇ、アンタの恨みに、俺ら巻き込むんじゃねぇよ！」
よく似た外見の二人が、にらみ合う。

「どういう意味だ」
「そのまんまだっての！　アンタが大変だったのは分かるけど、だからそこのお姉さんとか許せないって、要するに嫉妬じゃないか！」
ジュマさんが言葉を失った。

「そんなに大学行きたいんなら、行きゃいいだろ！　ここエバスじゃなくて、ケンディクだぞ！　それにアンタ、大人じゃないか。なら自分で行けるだろ！」
「きさま……」
怒気を越えて殺気を見せたジュマさんが、前へ出ようとした瞬間、その肩をぽんと白い手が叩く。

「まぁ待ちなさい、ジュマ君。やりあう前に、私の話も聞いてくれないか？」
教授が穏やかな声で、返事も待たずに続きを始めた。

「私の家系というのが、どうも代々好奇心旺盛でね。なかなかひとところに居つかないで、すぐ違う土地へ行くんだ」
「そんな話、あとでいいだろ」
ジュマさんがうるさそうに言う。

――分かるけど。
こんなときに、ここまで関係ない話を始められたら、ほとんどの人は怒るだろう。
けど教授、気にもしない。

「まぁまぁ。で、その先祖たちなんだが、ニルギアだのそのさらに西の大陸だの、ずいぶん放浪してね。挙句に行った先で素敵な女性を見つけては結婚するもんだから、うちはそうとう血が混ざり合ってるんだ」
話を聞いて、納得してしまった。教授のあの変人ぶりも、そういう家系だからに違いない。

「そんなわけでね、うちは兄弟でも髪や瞳はもちろん、肌の色まで違うんだよ」
「え……」
ここへ来て話が繋がる。
教授が悲しげな顔になった。

「実は私には、兄が居てね。キミたちみたいに黒い肌で、とても精悍で、しかも優秀な人だった。だから何十年も前だが、大学へ行ったよ。それもエバスで」
「――すげぇ」

アーマル君の言葉が、すべてを表してる。エバスなんかじゃ今だってまだ大変なのに、何十年も前にそういう肌の色で大学に行くなんて、ものすごいことだったはずだ。

「で？　おおかた、行った先でひどい目に遭ったんだろ」
ジュマさんの言葉が皮肉の色を帯びてるのは、自分もそうだった

からだろう。
教授も頷いた。
「ほらみろ、何も変わってないじゃないか」
勝ち誇ったような、ジュマさんの声。
けれど教授は、静かに続けた。
「遭ったさ。殺されてしまった。ただね、相手は同じような黒い肌だった」
まったく予想もしなかった言葉に、みんなが絶句する。

Episode：43

「キミがさっき言ったのと、似たような理由だった。裏切り者だそうだ」

誰も何も言えなかった。

「しかもその時いちばん嘆いてくれたのが、兄をみていた教授でね。その人の肌は白かった。いちばん怒ってくれたアパートの隣のおばさんは、肌が黒かった。いちばん心配してくれた友人は、肌が褐色だったよ」

教授の話は続く。

「肌が黒い兄とだけ、付き合う人も居た。逆に肌が黒くない私とだけ、付き合おうとする人も居た。同じ兄弟なのにだ」

悲痛な声。

「しかも、私の兄が黒いと知ると、離れる人も居た。逆に近づいてくる人も居た。意味がわからんよ」

教授にしてみれば、ほんとうにいたたまれなかったと思う。同じ兄弟で、周りもいろいろで、しかもお兄さんまで殺されてしまって……。

「なぁ、ジュマ君。こんな私は、何を信じてどこへ入ればいいんだ？」

「それは……」

答えられるわけがない。こんな問題、どんな賢人だってきっとムリだ。

「ジュマ君、キミの言うように白黒で分けたら、私の居場所はない。

だからきっと、そんな簡単なものじゃないんだ」
「だが……」
何か言いかけたジュマさんに、教授が首を振る。
「ジュマ君、キミが大変な目に遭ったのは分かる。私の兄もそうだったからね。それにキミらのような子たちが、ひどい仕打ちを受けているのも知ってる。だがこれとそれとは分けないと、物事がおかしくなると思うよ」
ジュマさんは下を向いたまま、何も言わなかった。いろいろと、考えてるのかもしれない。
「大学へ行きたいのなら、私のところへ来るといい。推薦状を書くよ」
「え……！」
はじかれたように、ジュマさんが顔を上げた。
「もう一度、そこから始めないか？　なに、途中まで行ってたんだから、残りを行けば済むよ」
「けど、俺は同胞の解放を！」
「そのためにも、私はもう一回学んで欲しいんだ。もっといろいろ背景を知って、そこから始めるべきだ」
教授が真っ直ぐ、ジュマさんの瞳を見つめる。
「でないと闇雲に動くばかりで、最後は立ち行かなくなる。そうなったら元通りどころか、みんなさらに落ちてしまうよ」
完全に黙ってしまったジュマさんを、優しい瞳で見ながら、教授が今度はいたずらっぽく言った。
「で、ジュマ君。私たちはイファさんのところへ、行く途中なんだが。案内でもしてくれないかね？」

「え？　あ、はい、俺でよければ」
意外にもジュマさんが快諾する。

「そうか、助かるよ。さて、みんな行こうか」
ジュマさんを先に行かせて、すたすたと教授が歩き出す。
あたしたちも慌てて追いかけたけど……その背中は、とても寂しそうだった。

Episode：44

◇Ａｒｍａｌ

昼なのに薄暗い道だった。
ケンディクでこういう場所は、実は少ない。なにせこの街ユリアスの南部にあって、温暖でしかも観光が売りだから、全体的に明るくて爽やかだ。だから余計に、異質な感じだった。

けどこういうところに住まなきゃいけないってことは、それだけ大変なんだろうなとも思う。
だってもしお金があったら、もっと開けた商業区か行政区に住むはずだ。だからここに居る人たちは、みんな何かの理由で貧乏なんだろう。

正直俺だってシエラに拾われてなきゃ良くてここ、下手すりゃもっとヒドイことになってたわけで、そう思うと他人事じゃない。
ここの人たちがみんなで行政区に住むには、どうすりゃいいんだろうと思いながら、通りを歩く。

「教授、イファさんってもう８０歳でしたっけ？　お元気ですよねー」
お姉さんは慣れてるらしくて、ほとんど気にしてなかった。もしかすると、ここの出身なのかもしれない。
「正確な歳は、よく分からんのだがね。ただ覚えてる出来事と大雑把な歳を照らし合わせると、そのくらいにはなるはずだ」

会いに行く人は、ずいぶん年寄りみたいだ。それで俺の親か爺さんか……ともかくそういう人と同郷なんて、すごすぎる。

やたらと期待しちゃいけないと思いつつ、わくわくするのを押さえらんない。だって俺にとっちゃ初めての、同じルーツを持つ人だ。

――会ったら、なんて言おう？

あんまり気安くしたらおかしいし、かといって畏まりすぎてもダメだろうし。

てか、よく考えたら俺、ニルギアのしきたりぜんっぜん知らない。ヤバい。

「あの、教授」

いちばん手近に居る、いちばん知ってそうな人に声をかける。

「なんだい、少年」

この人ヘンな呼び方するなと思いながら、俺は質問した。

「えっと、その、俺、ニルギアのやり方とか、何にも知らなくて……。会ったら、どうすればいいんですか？」

教授が笑い出して、俺の肩を叩いた。なんか腹立つ。

「いやいや、立派だよ少年。そうやって自分のルーツに気を配るのは、なかなか出来るもんじゃない」

褒めてるらしいけど、だったらなんで笑うんだ？

「あぁすまんすまん、笑ったのが気に障ったか。いや、可愛かっただけだよ少年」

って可愛いとか言われると、余計腹立つわけで……。ルーフェイアみたいな女子ならともかく、男子の俺に可愛いってナシだろう。

けど教授、余計に笑う。

「いやぁ、悪い悪い。でもほら、子供は私なんかから見りゃ可愛いもんだよ」

可愛いとか言った上に子供扱いとか、そりゃ俺子供かもしんないけど、さらに面白くなかったり。

Episode：45

「教授、いい加減にしたらどうです？　フォローになってませんよ」
「む、そうか？　それは悪かった」
ため息ついて、俺はそれ以上考えないことにした。この教授、やっぱりどっか天然で変人だ。
代わりにお姉さん――俺的にはこのほうが嬉しい――が説明を始める。

「あのね、そんなに心配しなくて大丈夫。まぁたしかにニルギアは、年長者に対しての礼儀はうるさいけど、ここは遠いユリアスだしね。ここで育って会いに来た子に、イファさんそんなこと言う人じゃないから」
どうやら会いに行く人、そんなに気難しくはないっぽい。

「もうずっとその人、ここにいるんですか？」
「ううん。最初は捕虜としてエバスかその周辺国かに、連れてこられたみたい」

捕虜としてってことは今はもう少数派の、直接ニルギアから連れてこられた人ってことだ。だったら不謹慎な言い方だけど、ニルギアの話が聞けるかもしれない。
俺は知らないから、すごく聞きたかった。ほんの少し残ってる記憶から考えると、生まれはたぶんニルギアだと思うけど、景色さえあやふやだし。

「最初ってことは、そのあとは？」
いけないかな、と思いながら、好奇心に駆られて聞いてみる。

「んー、全部知ってるわけじゃないけど。最初のところは、何かのどさくさで逃げ出したみたい。で、そのあとは仕事しながら転々として、最後にケンディクに落ち着いたみたいよ。――ですよね、教授」
「うん、私もそう聞いてる」
教授も同意する。

言葉では簡単だけど、きっと実際にはすごい経験をいっぱいしてきたんだろうな、って思った。
でもそんな人に俺、ちゃっかり会って話したりして、いいんだろか？

「あら、心配？」
「あ、はい……」
答えると、お姉さんが笑った。

「大丈夫大丈夫、あなた見た目からして、ニルギアの血だって分かるもの。イファさん喜ぶよ」
「そうですか？」
こんなふうに言われるとほっとする。
けど前を行く教授の背を見て、複雑な気分になった。

ずっとシエラの中に居たから、俺ほんとに世の中のこと知らない。
俺が肌が黒いだけで絡まれたり、逆にルーフェイアが白い肌ってだけで襲われたり。なんでそうなるか俺には分かんないけど、けど言ってる人たちはみんな、それが正しいと思ってる。

しかも本当に、肌が黒いってだけでひどい目に遭ってたりするから、余計にややこしかった。
だとすると見た目と血とがぜんぜん合わなくて、周りに好き勝手

なことを言われてお兄さんまで殺された教授は、どんな気持ちだっ
たんだろう？

Episode：46

「もしかして、いろいろ考えてるのかな？」
「え？　えぇ、はい……」
俺の顔をちらっと見て、お姉さんがそんなことを言う。てか、すぐ気がつくあたり、さすがだ。

「分かるよ、それ。私も初めて聞いたときは、考えちゃったもの」
お姉さんも同じだったとかって分かって、ちょっと嬉しくなる俺、ダメなヤツかも。でもどうしても、教授よりお姉さんだ。

「でもね、だからこそ教授、ニルギアに傾倒してるんだと思う。あそこって不思議だけど、大地に惹かれて来た人を拒まないから」
「そうなんですか？」
すごく意外だ。教授みたいな外見の人にひどい目に遭わされたのに、受け入れるとかすごすぎる。俺だったらムリだ。

「ホントよ。大地が広いからかな？　ニルギアが好きな人はどこの人でも、ニルギアの子なんだって」
「へぇ……」
写影で見た広い大地と空に、自由な雰囲気が見えてくる。
どこが誰のものとか、せせこましいことなんてなくて、みんな思うままに大地を駆けてたんだろう。

「いいよねー、そういうの。私もカレシ、そういう人がいいなぁ」
お姉さんの夢見る表情。めちゃくちゃ魅力的だけど、「カレシ」の中に俺は入ってなさそうだから、ちょっと複雑だ。

――って、何考えてんだよ俺。

こんなに目移りしまくって、これじゃただの浮気者だ。

心配になってルーフェイアのほう見ると、気づいた感じはなかった。バトル以外じゃおっとりしてるし大人しいから、こういうのもあんまり考えないんだろう。

ほっとしてる自分を、ちょっとだけ後ろめたく思いながら、お姉さんに質問する。

「ニルギア、何回くらい行ったんですか？」

ああいうふうに言うからには、きっと行ったことあるはずだ。

「2回行ったわよ。ってもそんな奥のほうじゃなくて、町から遠くない、観光を受け入れてくれる村だけだけど」

よく分からなくて訊くと、いくつかの村がツアーの拠点やルートになってて、昔ながらの生活を見せてくれるってことだった。

「それってどうかな、っては、ちょっと思うんだけど。でも外から来た人は、いきなり石臼に火吹き棒の生活なんてムリだから、ありがたいしね。向こうもお金が手に入るから、助かる部分あるし」

難しくてイマイチの部分もあるけど、お姉さんが言いたいのは要するに、折り合いつけてくしかないってことなんだろう。

ただやっぱり、変わらないでほしい気がする。俺のワガママかもしれないけど。

そんなこと考えながら歩ってたら、前のほうで教授たちが立ち止まった。

「ここだよ」

「え……」

言葉が出てこない。

だって目の前にあるの、崩れそうな小屋だ。こんな酷いとこにそのおじいさん、住んでんだろか。

Episode：47

「ホントに、ここなんですか？」
「そうだよ。あぁ、この家にびっくりしたのか」
教授がうなずいた。

「本当はね、どうにかしてあげたいところなんだが、なかなかね……。何よりイファさん自身が、人の世話にはならないと言い切っているし」
イファさんっていうのはすごい人なんだな、と思う。ふつうは誰かがどうにかしてくれるって言ったら、喜んでやってもらうのに。

「まぁニルギアの文化が、年長者は手本になるべし、だからね。世話になるなんてプライドが許さないんだろう」
俺はそんなふうになれるかな、と思った。今だってこれだけシエラの世話になってるのに、大人になって毅然と断れるだろうか？
逆に言うとニルギアがどんなところなのか、これだけでも分かる。

「ちょっと待っててくれないか、挨拶してくるから」
「はい」
きっといきなり何人もで押しかけるのは、マナー違反なんだろう。
まず顔見知りの教授とジュマさんが、家の外から声をかけた。

「ペドジフとジュマです。イファ殿、入ってもよろしいですか？」
「おお、そなたらか。入れ入れ」
意外なくらい張りのある声が返ってくる。

「ちょっとこのまま、ここで待っててもらえるかい？」
俺たちにそう言い置いて、教授たちが入っていった。

おじいさん、ちょっと耳が遠いんだろか？　けっこう大きな声で、やり取りしてるのが聞こえる。

「――そういうわけで、外に何人か待ってまして」

「気の利かんヤツじゃ。早よう入れてやらんか」

おじいさんの許可が降りて、教授が外れそうな扉を開けた。

「ほら、おいで。ちゃんとご挨拶するんだぞ」

「はい」

薄暗い中に目が慣れて最初に見えたのは、雑然と物が置いてある中で目立つ、白い歯とヒゲだった。

「よう来たの、ワシがイファじゃ。ニルギア生まれというのは、そなたじゃな？」

一目見た瞬間、何かが身体の中を駆け巡った。

同じ肌の色をした、同じ血を持つ人。今まで会った誰よりも、俺に似てる。

おじいさんも、同じことを思ったみたいだった。

「なんとまぁ、本当にニルギアの血じゃ。いったい何年ぶりじゃろう」

おじいさんが立ち上がって、杖をつきながら俺のとこへ来る。

「お前さん、もしかしてニルギア生まれか？　かすかだが、あの大地の匂いがする。懐かしいのう……」

とっても痩せた、なのにしっかり力のある手が、俺の頭を撫でた。

「よう来た、よう来た。いままでいろいろ、あったんじゃろうなぁ」

言われた瞬間、また泣きそうになる。なんか今日、俺ダメだ。

Episode：48

感激してるおじいさんに、教授が横から恐る恐るって感じ――この人にそんな感覚あったんだ――で、言葉をかける。

「実はこの子、部族の証を持ってまして」

「なんと、本当か？！」

おじいさんまでもが、驚いて声を上げた。やっぱり俺の指輪、かなりのものらしい。

「まぁこの子自身は、早くにご両親を亡くしたとかで、何も聞いてないそうですが」

「そうじゃろうの。じゃなきゃ、こんな離れたケンディクになぞ、居るわけが無い」

うなずいた後、おじいさんが俺のほうに手を出した。

「坊や、良かったら見せてくれんかの？」

「あ、はい、どうぞ」

鎖ごと、首から外して渡す。

それをおじいさんは、まるで何かの捧げ物みたいに恭しく受け取った。

「おぉ、ネラマニの印か。これはずいぶん由緒正しいものだな。む、文字が小さいの」

「私が読んだ限りでは、ドラバ＝ンドクの娘、エンマ＝オルニテの子にこれを贈る。末永く栄えんことを、と書いてありましたぞ」

言いながら教授が、拡大鏡を差し出す。

「どれどれ……なんと、本当じゃ！」

おじいさんの手が震えだした。

「間違いない、間違いないぞ……ゴルン山の南、豊かなるティティの末裔、ラダ＝ティティ族。こんなところで出会えるとは！」

「あの、知ってるんですか？！」

思わず尋ねると、おじいさんが俺の肩を掴んだ。

「知ってるも何も！　これはな、ワシの一番上の姉の嫁ぎ先でラダ＝ティティの族長、ロドマ＝ラダ殿が持っていたものじゃ！」

「え……」

頭がついていかない。

俺の指輪が「部族の証」って呼ばれるもので、元々は誰かニルギアの族長が持ってたもので、それがこのおじいさんが知ってる人で……。

「じゃ、じゃぁ……もしかして、親戚？！」

「そのとおりじゃ！」

おじいさんが、俺を抱き寄せた。

「よう生きとった。よう生きとった。ご先祖様に護られたんじゃなぁ……」

枯れた、でも力強い腕の中。

「姉のところはやられて、部族が全滅でな、もう誰も残っとらんと思っとった。けど誰かが、これを持って逃げ延びたんじゃろうな」

おじいさんの涙が俺を濡らす。

「ワシのところもそのあとやられて、売られて散り散りでな。あとで風の噂に聞いたが、やはり部族は全滅だそうじゃ」

何も言えなかった。普通に暮らしてただけなのに、なんでそんなことに、ならなきゃならないんだろう？

Episode：49

「あぁ、すまんの、子供に愚痴など聞かせてしまったわ。どれ、もう一度よく見てみるかの」
おじいさんが俺を離して、また指輪を眺める。
「ロドマ殿は、指輪を誰に渡したんじゃろうなぁ？　一族の誰かなのは、間違いないが……」
なんだかすごく、申し訳ない気持ちになる。俺が何も覚えてないせいで、全く手がかりが無い。

「――すみません」
いたたまれなくなって謝ると、おじいさんのほうが慌てた。
「いやいや、謝らんでいい。生き延びただけでも運がいいのに、それ以上望んだワシのほうが悪いんじゃ。ほら、いいから顔をよく見せておくれ」
促されて、顔を上げる。

「やっぱりあちらの系統じゃの、顔立ちがロドマ殿に似とる。そういえば、名前はなんと言ったかな？」
「アーマルです」
姓のほうは知らない。何かあったはずだけど、覚えないうちに母さんは死んだし。

「アーマルとな？　間違いないな？」
「は、はい」
急におじいさんの語気が強くなって、気圧される。

「そうか、そうじゃったか。ロドマ殿の直系か」
「え？」

俺の名前、何か秘密でもあったんだろか？

「あの、何か……分かったんですか？」

おじいさんがうなずいた。

「そのアーマルと言う名、ロドマ殿の長男の名じゃ。ワシの姉が天から教えられて、子供に付けたんじゃ」

「はぁ……」

天から教えられるとか、よく分からない。

俺が不思議がってるのに気づいたんだろう、教授が横から口を挟んだ。

「ニルギアじゃ族長の子が生まれる前に、代々伝わる聖なる地へ母親が行く風習があってね。そこで思い浮かんだ名を、付けることになってるんだよ」

「へぇ……」

教授が言うには、たいていは名のあるご先祖様や精霊の名前らしいけど、たまによく分からない名が出ることもあるんだって言う。

「ロドマ殿の息子のときも、あんまりにも変わった名前なもので、物議を醸したんじゃ。じゃがもう一度行っても姉はもちろん、一緒に行った者まで同じ名を唱えて帰る有様でな」

なんかすごくオカルトだ。

「最後はロドマ殿まで行ってみたものの、同じことが起こっての。これはもうご先祖様の意思じゃろうと、そのまま付けたんじゃ」

言っておじいさんがまた、俺の頭を撫でる。

Episode：50

「歳から見て、お前さんはきっと、ロドマ殿のひ孫じゃな。親御さんが混乱の中、その珍しい名を借りたんじゃろう。お前さんが独りになっても、どこの誰か分かるように」
「あ……！」
たしかにそうだ。そんな騒ぎがあった名前なら、覚えてる人だってたくさんいるはずだ。

「あのときは分からんかったが、ご先祖様はこの日が来るのを、分かっておったんじゃのう。こんな珍しい名じゃなければ、会っても分からんかった」
「――はい」
きっとそうなんだと思った。そんなおかしなこと信じるのかとか、ただの偶然だとか言われそうだけど、俺的にはご先祖様のおかげだと思う。そういうことがあったっていい。

「……イファさんすみません、つまりどういうことでしょう？」
感激してる俺たちの間に、妙に冷たい声が入った。ジュマって人だ。

「む、分からんかったか？　要するにこの子は、偉大なるティティ王国の末裔、ラダ＝ティティ族の生き残りじゃ」
「やっぱり、それでいいんですね」
やり取りが続くけど、どっかがヘンだ。何かすっきり入ってこない。
ジュマさんが、俺のほうに向き直った。
「アーマル、だったな。俺たちと一緒に、解放運動をやらないか？」

「解放……？」
よく分からなくて、思わず繰り返す。
ジュマさんが訳知り顔で頷いて、話し始めた。
「お前も少しは知っただろう？　ともかくエバスやその周辺じゃ、俺たちニルギア系の人間は、まともな職にも就けない。それを何とかするんだ」
「え、でも、それってさっき……」
さっきそれで、大騒ぎになったはずだ。で、教授からこの人、やり直せって大学に誘われたはずだ。
ジュマさんが、また頷いた。
「そうだ。俺はもう一度大学へ行く。そしてまた、解放運動をする。一緒にやろう」
要するに、今じゃないけどこれから、そういう運動に加われってことらしい。
少し考える。
俺はあんまり実感なかったけど、ニルギア出身の人が特に西の大陸で、大変なのはたしかみたいだ。実際俺もこのケンディクで、あんなふうに襲われたし。
けど、なんでだろう？　正しいことのはずなのに、どうしても心の底から賛成できない。
「なぜ悩む？　自分の同胞が困ってるなら手を差し伸べる、当たり前の話だろう？」
そう、当たり前のことだ。なのに、何かがやっぱりおかしい。
「……いい加減にしたらどうですか」
厳しい声で割って入ったのは、ルーフェイアだった。

この子がこんなふうに怒って、こんな声出すなんて、初めて見た気がする。

Episode：51

「あんたは黙ってろ。関係ない」
「だからです」
いつもの大人しいルーフェイアからは、想像も付かない。けどそんだけ、メチャクチャ怒ってんだろう。

――でも、何にだ？
それがどうしても分からない。
ルーフェイアが続ける。

「あたしが関係なくて、アーマル君が関係あるなんて、なんで分かるんですか？　そんなの、ジュマさんが決めただけなのに」
「なんだと……！」
激昂したこの人に、でもルーフェイアは怯まなかった。ってもこの子が暴力沙汰で怯むなんて、絶対無いわけだけど。

「白いくせに何が分かる！　お前が何か、この手のことでヒドい目にでも遭ったのか？！」
「遭ってません。でも、彼は友達です」
話が噛み合ってない気がするけど、どっちの言うこともなんとなく分かった。

黒か白か、そういう文字通りの色分けでひどい目に遭った、ジュマさん。
そういったことは関係なしに、実力だけでいろんなものを計るルーフェイア。
どっちの言い分も間違いじゃないから、どうやっても歩み寄らないって寸法だ。

ただ俺的にはそれがどうこうより、ルーフェイアが俺を友達認定して、擁護してくれるのが嬉しかったり。
この子のこと狙ってる連中に見られたら、絞め上げられそうだ。

ルーフェイアが続ける。
「だいいち……アーマル君がティティの末裔じゃなったら、誘いましたか？」
ジュマさんの表情が変わった。図星だったみたいだ。

――だとしたら。
さっき俺のこと解放戦線に誘ってくれたけど、下心ありありだった、ってことになる。で、その下心ってのが……俺を利用するってことだろう。

きっと探せば、俺みたいにティティの血が入ってるのは、他にもいっぱい居るんだと思う。ただ今それがはっきり分かってるのは、ここじゃ俺だけだ。だからそれを使って、運動を有利に進めようってことなんだろう。

でも、冗談じゃない、と思った。解放戦線とやらに興味がないわけじゃないし、ひどい目に遭ってる人は助けたいけど、こんなふうに利用されながらなんてイヤだ。
さっきから感じてた違和感は、きっとこれだ。

ルーフェイアを論破するのはムリと思ったのか、ジュマさんが俺のほうを向く。
「お前は、俺の言うことが分かるだろう？」
「分かりません」
即座に言い返した。

「……裏切るのか」
「俺は誰も裏切ってません。てか今さっき会ったのに、どうやって裏切るんだよ！」
思わずホンネが出る。
キレイ事に隠した野心に、吐き気がする。

Episode：52

「要するにアンタ、やっぱ自分のためじゃないか！　その運動でアンタの気は済んでも、俺はどうなんだよ！」
どうしてか分かんないけど、また泣きたくなる。

ニルギアがヒドい目に遭ったのは、本当だ。そのせいで今もヒドい目に遭ってる人がいるのも、ウソじゃない。俺の親もたぶん、一部はそういうことが原因だ。
けどそれでも、納得いかなかった。

たしかに全部取られた。親も、住むところも、何もかも。
だけどシエラに拾われて、掴んだ。食べるもの、住むところ、先輩、友達……。

「運が良かっただけかもしんないけど。けど俺だって頑張ったんだ！　じゃなきゃシエラの、Aクラスに居られるかよ！」
もう何が言いたいかも分からない。ただただ、押し付けられる何かがイヤだった。

「……ジュマ君、やめなさい。この子にそういうものを、背負わせちゃいけないよ」
教授の静かな声が響く。
さらに別の声が加わった。

「そうじゃぞ、ジュマ。この子の先行きは、この子が決めねばならん」
言ってまた、おじいさんが俺の頭を撫でた。

「過酷な運命の中、この子は不思議と助けられて、まっすぐ育った。それは大切にせねばならん。曲げてはダメじゃ」
さらにおじいさんが、ルーフェイアのほうを見る。
「ごらんジュマ、あの子を。あれほど姿が違っても、この2人は互いに相手を友達だという。それこそが、お前の目指す世界ではないのかの？」
静かに諭されて、ジュマさんがうなだれた。
「そなたは確かに、不運じゃった。理不尽な目にもずいぶん遭うた。それはワシも認めよう」
おじいさんのシワだらけの黒い手が、少し色の薄い、ジュマさんの手を握る。
「じゃがの、その恨みを継がせてはならん。どれほど苦しくても、若い者に継がせてはならん。それが大地の教えじゃ」
遠くを夢見る瞳。
「遥かな大地から引き離されて、北の地からも逃げ出して……ここへ来てやっと落ちついたとき、ワシは夢を見たのじゃ。ネラマニ様の夢じゃった」
ネラマニと言えばたしか、豊穣の女神か何かだ。
「女神様は、ワシに言われた。恨みは捨てよと。女神なる自分が引き受けるから、恨みは捨てて同胞の支えになれと。くれぐれも、恨みから何かをしてはならぬと」
おじいさんが深く息を吐いた。
「ワシもの、最初は意味も、どうしていいかも分からんかった。じゃがネラマニ様の言うことじゃ、なんとしてでも従わねばならんと

思うて、必死に同胞を助けて回っての」
にこり、とおじいさんが笑う。
「気づいたら、ワシを捕らえた者への恨みは消えておって、そのときやっと分かったんじゃ。あのまま恨んでおっても、時間のムダじゃったと」
ジュマさんが「意味が分からない」という顔になった。

Episode：53

おじいさんがまた笑う。
「うむ、何のことか分からんじゃろうな。むしろ、分かるほうがおかしいの」
ひとりで頷きながら、話を続ける。
「恨むというのは要するにの、昔あったことに心が縛られておるということじゃ。分かるかの？」
「ええ、それはまぁ……」
この辺は心当たりがあるのか、ジュマさんも同意した。
「いい子じゃ。それでの、ジュマよ。過去に囚われておっては前へ進めん。進んだとしても曲がってしまって、道を踏み外す。これは時間の無駄じゃろう？」
「あ……」
ジュマさんがはっとした表情になった。
「そなたが悪くないのは、ワシもよう知っとる。本当に運がなかったし、理不尽な仕打ちじゃ。じゃがそれを恨んでも、何も戻って来ん」
お爺さんの表情が一転して、悲しいものになる。
「何も、戻っては来ん。ワシの親も兄弟も、あの大地での暮らしも、何ひとつ戻らん……」
静かなのに、耳を塞ぎたくなるほど辛い言葉。
俺もジュマさんも教授も、みんなワケが分からないまま、いろいろ無くしてるけど。
でもいちばんヒドイ目に遭ってるのは、おじいさんのはずだ。本

当に何もかも無くしてしまって、しかもこんな年になるまで、帰ることさえできないのだから。

「のう、ジュマよ。そなたはまだ若い。ワシの半分も生きとらん。じゃから、まだまだやれるはずじゃ」

おじいさんの言葉は本当に悲しくて……なのに不思議と力強かった。

「そなたはたぶん、この子の……アーマルの持つティティの血筋を前面に出せば、人が集まると思ったのじゃろう？」

指摘されて、ジュマさんが視線をそらしながら、小さく頷く。

その頭を、おじいさんが手を伸ばして、ぽんと叩いた。

「自分に自信を持て、ジュマよ。たしかにそなたは血筋は分からぬし、大学へも行きそびれた。じゃが大学に入ったのは実力じゃし、この東地区で人を束ねているのも実力じゃ」

言われたことによっぽど驚いたのか、ジュマさんが瞳を見開く。

「自分を正当に評価することと、卑下することと、過信すること。どれも紙一重じゃ。踏み外してはならんが、自身をきちんと見れぬ者には、未来はないのじゃよ」

しばらく押し黙ったあと、ジュマさんが口を開いた。

「俺にはよく、分かりません」

それを聞いて、おじいさんと教授とが笑い出す。

「それでいい、それでいい。それこそが正しい道じゃ。悩んで迷って見つけるもんじゃ」

「そうそう、イファさんの言うとおりだ。ともかくジュマ君、さっきも言ったが大学へ来なさい。そこからやり直したって、まだまだ

時間はあるよ」

年寄り2人の言うことが妙に説得力あるのは、やっぱり修羅場くぐってるからだろう。

俺らの言う「最前線」とはまた違うけど、この人たちも別の種類の最前線で、バトルしてきたはずだ。

そんなこと考えてる俺に、おじいさんが向き直る。

Episode：54

「さてさて、ロドマ殿のひ孫よ。いろいろと、情けないところを見せてしまったな」
「あの、アーマルで十分です。てか、情けなくとかないです」
なんたって、ニルギアがまるごとひとつ潰れるような話だ。しかもおじいさんなんて、その真っ只中に居た人だ。簡単になんて行かないんだろう。

「ロドマ殿に似て、真っ直ぐないい子じゃな。まぁ今回のことは、ワシに免じて許してくれんか？　ジュマにはよく言い聞かせておくのでの」
「そんな、許すとか！」
あるわけない。分かってもらって、かばってもらって、親切にしてもらったのに。
何より、初めて会った親戚だ。

「ほんにいい子じゃなぁ」
おじいさんが目を細めて、すごく嬉しそうになる。
こんな表情してもらえて良かった。会いに来て良かった。

「出来たら、そなたとニルギアへ行きたいのぉ。あの山、あの大地、あの聖地。教えてやりたいことが、たくさんあるんじゃ……」
「あの、じゃぁ俺、働きます！」
気づいたときにはそう言ってた。

「たくさん働いて、旅費貯めますから！　あと何年かかるか分からないけど、頑張りますから」
そこまで言って、はっとする。そんな先までおじいさん、生きて

られるだろうか？
おじいさんも、同じことを思ったらしい。
「いいんじゃよ、そこまで気を遣ってもらわんでも。なんせこの年じゃから、明日にでもくたばるかもしれんし」
「けど……」
たしかにそうかもしれないけど、そんなのイヤだ。俺、おじいさんと一緒にニルギア行きたい。
「なら、行きますか？　この夏にでも」
横から割り込んだのは、教授の声だった。
「ティティの末裔と、部族の証の指輪が見つかっては、早く現地調査に行かないと。もちろん、一緒に行ってもらいますぞ」
「ワシは施しなぞ浮けんぞ？　長老がそんな真似をしては、沽券に関わるからの」
言い返すおじいさんに、教授が意味ありげな笑みを見せる。
「誰がイファ殿だと言いましたかな？　私が連れて行くのは、こちらの少年ですよ」
そして明後日のほうを向いて、うそぶいた。
「ただ、この子はまだ未成年ですからねぇ……誰か後見人を、同行させないと」
「ふぅむ」
おじいさんが顎に手を当てて、考え込む。
「それは困ったのぉ。この子には親がおらんから、誰か行かなくてはならんな」
見え透いたやりとりに、みんな笑いをこらえるのに必死だ。

「いいか、ワシはこの子に付いて行くんじゃからな？」
「分かってますよ。それよりイファ殿、夏までは生きてくださらないと、この子が後見人を無くして、行けなくなってしまいますぞ？」
「分かっとるわ」
もうこれには、悪いと思いながらも、吹き出して大笑いするしかない。

Episode：55

「なんかその、すみません……」
「気にするな少年」
俺が笑いながらも謝ると、教授は笑ってひらひらと手を振った。
「もともと実地調査自体は、行く予定だったからね。同行者が2人くらい増えてもどうにかなるし、何より現地を知る人たちだ。誰も文句は言わないよ」
言って教授が、今度はジュマさんの方を向く。
「ジュマ君、大学の入学試験は来月だ。編入になるか通常の受験になるかは、調べないと分からないが、まだ頑張れば間に合うぞ？」
「え……」
あと2ヶ月弱で準備しろとか、ムチャクチャなことを言われて、ジュマさんが呆然とする。
「頑張って受かったら、キミもニルギアに連れてってあげよう。なに、勉強は見てあげるよ。だから死に物狂いでやってみなさい」
教授にウインク――気持ち悪いです――されて、ジュマさんががっくり肩を落とした。
「教授の死に物狂いって、マジで死に掛けるじゃないですか……」
「大丈夫大丈夫、今までだって死んじゃいないだろ？」
話しからすると教授、前科があるみたいだ。それにあの嫌がり方だと、文字通り死に物狂いなんだろう。
――何するんだろ？
ちょっと興味が湧く。もしかして、時間内に解かないと焼け死に

そうになるとか、教授の扮した緑怪人にボコボコにされるとか、そういうのなんだろか？
だとしたらさすがに、ジュマさんが気の毒かもしんない。
やり取りを見てるおじいさんは、すごく楽しそうだった。
「ほれ、ジュマよ。勉強せんか。さもないと、ワシらと一緒にニルギアへは行けんぞ？」
てか、しっかり煽ってるし。
そんなやり取りをみながら思う。
今までほとんど意識したことのなかった、ニルギア。行ったことはもちろん、見たこともない故郷。
そこへ行けば、何かきっと分かると思う。
分かってる。行ったからって、親父やおふくろが生き返るわけじゃない。俺の住むとこがあるわけでもない。
でも行ったら、何かが始まるはずだ。
「それにしても、こんな日になるとはの。ニルギアを出てから、今日は最良の日じゃ」
「まったくですな。こんな日があるから、人生はやめられませんわ」
年寄り2人が笑う。
会話の意味は俺には、分かるようで分からない。けどいつかきっと、分かるようになるんだろう。
「せっかくじゃ。今日は宴と洒落込むかの？」
「おぉ、いいですな。すぐ手配しますよ」
「む。施しは受けんとあれほど――」
笑いながらの、さっきと同じようなやり取り。きっと2人とも、分かってやってるんだろう。

「なになに、私が用意するのは、この少年への祝いの宴ですぞ？
まぁ後見人のイファ殿にも、客人として来ていただきますが」
「そうか。それなら仕方ないの」
俺たちも笑いながら、そのやり取りを聞く。
その日は夜遅くまで、ニルギアの太鼓の音が響いた。

Episode：56

◇Rufeir

硬い色の海に、陽の光が踊る。
ケンディクへ出かけてから2日。あたしは船着場に来てた。
湾の中に入ってきた連絡船が、しっかりと繋がれる。

「お、来てたのか」
「イマド！」
何日ぶりだろう？

「休みの間、お前どっか行ったのか？」
「あ、うん、いちおう……」
玄関へ続く坂を、2人でのんびり登る。
やっぱりこのほうがいいな、と思った。他のみんなが悪いわけじゃないけど、イマドといるのがいちばん落ち着く。

「そういえば、ケンディク……行ったの」
「独りでか？　珍しいなー」
勘違いしたイマドに、慌てて説明した。

「じゃなくて、アーマル君と。その、シュマーから流出した品、取りに行こうとして……」
説明が支離滅裂だ。
「なんかよく分かんねぇけど、アーマルのヤツと出かけたのは分かった」
イマドがいつもどおり、いい加減に納得する。

「良かったな。面白かったみたいじゃねぇか」
「うん」
いわゆる「面白い」とは少し違うかもしれないけど、すごく良かったのはたしかだ。

「アーマル君、親戚……見つかったの」
「マジか？　ムチャクチャ運いいじゃねぇか、あいつ」
シエラじゃ親はもちろん、親戚も居ないのが当たり前だ。だから後から見つかるなんて、本当に稀なケースになる。

「何よりだな。やっぱ誰か1人でも居ると、違うかんなー」
自分も似たような立場のイマドが、ひとりで何度も頷いた。

「その人、ケンディクに居たのか？」
「うん。――あ」
いろいろ言ってしまってから気づく。こんなこと、あたしが喋っちゃって良かったんだろうか？
心配になって訊くと、イマドが大笑いした。

「アイツ、ンなこと言うヤツじゃねーよ。つかアーマルが、お前に言うわけねー」
「そなんだ」
断言されてちょっとだけホッとする。さすがにずっとアーマル君と一緒に居るだけあって、イマド、よく分かってるらしい。

「あとで、お祝いでもすっか」
「いいかも」
そんな話をしながら、校舎まで差し掛かった。

「寮？」

「いや、先にメシ。腹減った」
ちょうど昼時だから、イマド、お腹がすいてるんだろう。

Episode：57

「寮？」
「いや、先にメシ。腹減った」
ちょうど昼時だから、イマド、お腹がすいてるんだろう。

「メニュー、何だか知ってっか？」
「ごめん……」
言いながら入った食堂は、ごった返してた。いちばん混んでるところに、ぶつかってしまったらしい。

「あー、これじゃ座れねぇな」
「……出直す？」
お腹が空いてるからこれはないだろうと思いつつ、訊いてみる。

「それナシ。腹減って死ぬ」
「だよね……」
どこか空いていないかと見回すあたしに、声が飛んできた。

「ルーちゃん、こっちこっち！」
ヴィオレイ君だ。

――でもなんで、呼ぶのあたしなんだろう？
イマドが隣に居るのに、そっちは無視なのが不思議だ。
ただ当のイマドのほうは、ぜんぜん気にしてない。そのまま声のほうへ歩いて行って、話しかける。

「ったくてめー、席まだ空いてんのに、なんでルーフェイアだけ呼ぶんだ」

「そりゃだって、ルーちゃん可愛いし」
いつもの、よく分からないやり取りが始まる。
「ほら、ルーちゃん座って座って。何か要る？　もうメニュー決めた？　俺取ってこようか？」
「えっと……」
矢継ぎ早に言われて、言葉に詰まる。ヴィオレイ君すごく気が付くし、いろいろやってくれるけど、この勢いは苦手だ。
「あ、ごめんね、まだ決まってなかった？　じゃぁ適当に持ってこようか？　あっさりセットにする？」
「ヴィオレイ、いい加減にしろ。ルーフェイアが困ってる」
遮ったのは、アーマル君だった。

――ちょっと、変わったかも？
ほんの数日前まで彼、こんなふうに割り込んだりしなかった。だからすごく無口で、周りに関心がないと思ってたくらいだ。
やっぱりこの間ルーツが分かったのが、影響してるんだろうか。
「アーマル、お前なんか変わったな」
あたしと同じこと思ったらしくて、イマドがそんなことを言う。
「ルーフェイアの前じゃダンマリだったのに、どうしたよ」
「どうしたって……うーん、なんでだ？」
本人も別に、意識してるわけじゃないみたいだ。
「アーマルったら、昨日辺りからマジうるさいよ。せっかくルーちゃんに話しかけようとしても、止めたりするしさ」
「だってお前、押しが強すぎだし」
前にはなかった自信を、アーマル君から感じる。

Episode：58

「ルーフェイア、大人しいんだぞ？　お前がそんなに喋りまくったら、ヒクって」
「え……それヤバイやばいヤバイ」
ヴィオレイ君が焦り始めた。

「えーと、マジ今までひいてた？　ゴメンね」
「あ、うん、だいじょぶ……」
口ではそう言いながらも、これで少し勢いが収まってくれればいいな、なんて思う。

「アーマル、お前、親戚見つかったってな」
「え？　あぁ、うん。見つかった」
一瞬きょとんとしてから、アーマル君が答えた。

「良かったじゃねぇか。ケンディクに居たってマジか？」
「マジだよ。俺も驚いてる。俺のひい爺さんのとこへ嫁に行った人の、弟だってさ」
「ややこしいな」

楽しそうな会話。
アーマル君がこんなに話すの、初めて聞いた気がする。あの日大学まで回って、本当に良かった。
あの教授は、ちょっと困るけど……。

「もうその人、８０歳だとかでさ。俺、ちょこちょこ行こうかと思う」
「いいんじゃね？　喜ぶだろうし」

なんだかイマドまで嬉しそうだ。

「でさ、俺、今度の夏休みにその人と、ニルギア行ってくる」
「マジかよ。ホントの里帰りじゃねーか」
べしっとイマド、アーマル君の頭を叩く。この辺男子ってほんとに乱暴だ。

「土産持って来いよ」
「金ないって。それよりイマド、オマエ、ルーフェイアに教えてないじゃん」
「ん？　何がだ？」
言われたイマドが、ぞんざいに答える。
アーマル君が苦笑しながら言った。

「進路のこと」
「あー、コイツの進路とか、別に悩む話じゃねーから忘れてたわ」
なんかあたし、忘れられてたらしい。

「どうせコイツ、ストレートに上級じゃん」
「そりゃそうだけど、教えるくらいしろよ……」
ため息をつくアーマル君に、イマドが訊いた。

「そーいや、お前は決めたのか、進路。俺がアヴァン行く前、悩んでたろ？」
「ああ、うん、決めた」
誇らしげな表情を、アーマル君が見せる。

「工兵の方にする」
「へー、いいんじゃね？　お前、そーゆーの向いてそうだし」
うなずいてるとこを見ると、イマド、ずっとそう思ってたんだろ

う。

Episode：59

「ニルギアってさ、今けっこう、すごいことになってるじゃん？」
イマドやヴィオレイ君が、頷く。

「俺、ちょっと調べたんだ。そしたら内戦とかすごくて、メチャクチャ貧しくて、どうにもなんないらしくて」
「僕もそう聞いてるなー」

あたしの知ってる範囲でも、やっぱりそんな内容だった。
教授なんかも同じこと言ってたけど、ニルギアはまず内戦がすごい。血で血を洗う戦いが続いていて、落ち着く暇がない。しかもこれが、互いの憎悪をさらに煽るから、まさに泥沼だ。

さらにその余波で、相当数の難民が発生してる。
当然だけど難民はまともな仕事がなくて、子供は学校に行くこともできない。だから大人になっても読み書きさえ出来ず、仕事がないの悪循環だ。

事の発端はともかく、この辺をどうにかしないかぎり、人がまともに生きていくことさえ難しいだろう。
ただなにしろ規模が大きいし、何世代にも渡った根深い話だから、誰もどうにも出来ないのが現状だった。

「思ったんだけどさ、俺ってニルギア生まれの割に、相当ラッキーかなって。上手くシエラに入れて、けっこう好きにやれてるし」
アーマル君が淡々と言う。

あたしとしては、彼がシエラの本校に居るのは実力だと思う。

でもシエラそのものに来られたのは、たしかに運が良かったって言える。何しろほとんどのニルギアの孤児は、シエラにたどり着くことさえないのだから。

「だからさ……上手く言えないけど、工兵のほうで技術覚えてさ。出来たら大学とかも行って、なんかこう、学校とか作れるようになりたいなって」

言ってから、恥ずかしそうにアーマル君が頭を掻いた。

「その、なんてかな。馬鹿みたいかなって思うんだけどさ。けどもしかしたら、何か出来るんじゃないかなって」

「いいんじゃね？」

肯定したのはイマドだった。

「やってみなきゃ、分かんねぇんだしさ。じゃなくても、そういうの覚えといて損ねーだろ」

「たしかにねー。上級上級って言うけどさ、上級になっても、そういうのは出来そうにないし」

ヴィオレイ君も同意する。

アーマル君がちょっと恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑った。

その3人を見ながら思う。

黒い肌に黒い髪、典型的なニルギア風のアーマル君。逆に、白い肌にダーティーブロンドのイマド。出身がどこか良く知らないけど、その中間風のヴィオレイ君。

見事なくらいに見かけが違うけど、みんな仲良しだ。

「今度買出し行こうぜ。せっかくだから何か作るわ」

「賛成！　ルーちゃんも行こう」

「……だからそれやめろよ。ルーフェイアがヒクから」

「あ、やべっ！　ルーちゃんごめん！」
笑い声が、食堂に響いた。

◇お知らせ◇
「メジロと女の子」の、受賞が決まりました。と言っても佳作なんですが（苦笑）
とりあえず受賞は受賞なので、掲載を取りやめます。ご了承ください

◇あとがき◇
ここまで読んでくださって、ありがとうございました♪この話は、ここで完結です。
行き当たりばったりで始めて、よく破綻しなかったかも……（汗）
明日からはまた新作に入ります。【夜８時過ぎ】の更新です。たぶんというか、かなり大雑把にしか決めてません。頑張らないと……
感想・評価歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9035j/

未踏の郷里　ルーフェイア・シリーズ13

2011年2月4日18時11分発行